

畠地帶総合土地改良事業伊那西部地区

伊勢並・赤坂遺跡

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1995. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区

伊勢並・赤坂遺跡

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1995.3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

序

今度、平成6年度畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区が実施されるにあたり、この区域内に伊勢並・赤坂遺跡が含まれており、両遺跡の緊急発掘調査を実施いたしました。

この事業は道路拡幅・整備が主目的であり、従って調査方法や範囲に制限が生じ、遺構の全貌は把握できませんでした。

伊勢並遺跡は過去2回（平成3年度 平成4年度）に実施され、多くの成果を得ておらず、今回の調査に着手する前に参考にさせて頂きました。

今回の調査結果については縄文中期竪穴住居址8軒、平安時代中期竪穴住居址1軒が検出され、これに関連する多量の遺物が出土しました。

赤坂遺跡は過去1回（昭和48年度中央道開削時）に実施され、長きに亘る複合遺跡の実態が明らかになり、今回、調査をするに当たり、多くの期待感を抱いていました。ところが調査を行ってみると、遺構・遺物の検出は全く無く、範囲確認が出来ました。

遺跡本来の意味からすれば、埋蔵しておくのが最も適した方策ですが、社会状況に応じて記録保存という措置をとつてまいりました。

調査に当たっては数人の地権者、土地改良区役員の全面的な協力を得て、調査团长に友野良一先生をお願し、調査を開始しました。

発掘調査は11月上旬から12月上旬にわたって行なわれたが、毎朝、霜柱が立ち、作業進行に支障をきたしました。ここに調査報告書が刊行されるに当り、考えるものがあります。

最後に、懇親丁寧に御指導下さった県教育委員会文化課、上伊那地方事務所土地改良課職員一同、酷寒の中、手を暖めて調査に当られた調査員、作業員の皆様に衷心より御礼申し上げる次第であり、報告書の活用を切に望むものであります。

平成7年3月3日

伊那市教育委員会

教育長 宮 下 安 人

まえがき(伊勢並・赤坂遺跡の環境)

遺跡の位置

伊勢並遺跡は、長野県伊那市西町区小黒原地籍、小黒川左岸河岸段丘突端面に位置している。赤坂遺跡は伊勢並遺跡同様に西町区小黒原地籍にあり、東側で伊勢並遺跡にその境を接している。両遺跡地までの道順はJR飯田線伊那市駅で下車し、駅前の道路を西へ200m位行った四角を左折し、西駒ヶ岳線を南方へ150m位進むと三叉路があり、ここを右折して坂道を西方へ向う。途中左手に天台宗円福寺、右手に荒井神社が静寂の感を呈し、地域住民の信仰の中心地となっている。荒井神社前の三叉路を左に曲がると、ただちに左手に伊那健康センターの白い建物が目に入り、さらに西進すると左手に長野県立伊那弥生ヶ丘高等学校、右手に伊那市立伊那中学校の校舎が整然と建てられている。伊那中学校の南側がY字路になっており、左折すると左手に長野県伊那文化会館が、右手に長野県伊那勤労者福祉センターがあり、その周囲に広範囲な駐車場、運動場、テニスコート、陸上競技場が展開している。

勤労者福祉センターの西側に婦人の家が建てられており、この付近の交差点を左折すると、T字路となる。この位置から西方へ300m位行くとY字路につきあたり、右手に道を取れば、ますみヶ丘、横山集落に至る。反対に左手に直進すれば小黒川左岸段丘崖面を通過して大坊集落に至る。後者の道順を選択して南へ250m位行った畠地帯が伊勢並遺跡の西境となっている。前述したようにこれに接して西側が赤坂遺跡であり、遺跡地の中心と思われる地点に中央自動車道が南北に走っている。

歴史的環境

今回、ここでは小黒川を中心にして两岸段丘面上に展開している19ヵ所の遺跡について概観してみよう。この一帯は旧石器から近世に至るまでの各時代にわたる遺跡が存在しており、連続として人間の営みが続いてきたことが実証でき、伊那市の歴史を語る上で最も重要な地域の一つに加えられよう。

伊勢並遺跡は今回の調査を含めて4回の発掘調査を実施している。先土器時代の葉状尖頭器剥片石器、縄文早期の斜縄文土器、格子目押型文、茅山上層式、天神山式、縄文前期初頭木島式、縄文中期の五領ヶ台式、井戸尻式、曾利式、弥生中期等の土器が出土。時代は下って平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、青銅製和鏡が発見され、複合遺跡の様相を強くかもし出している。赤坂遺跡は今回の2回目の調査となった。第1回目は昭和48年中央道開通時に、木島式、曾利式土器片が小量出土し、遺物散布地のように思われる。

ますみが丘遺跡は小黒川段丘面の最奥地にあり、水の便からして遺物の出土は希薄であった。従って縄文中期土器数片と、同期の石鎌、打製石斧数点の出土を確認しているに過ぎない。上ノ山遺跡は本年夏場に発掘調査を実施し、次のような成果を得ている。遺構としては江戸時代掘立柱址4棟、昭和時代竪穴防空壕2基、昭和時代ゴミ捨場（特に明治時代～昭和時代の磁器が多量に層になって出土した）。遺物としては縄文早期茅山式土器片、石鎌、近世陶器片、前述した磁器片を検出した。以前に刊行された発掘調査報告書に井戸尻式土器、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器の出土が報じられている。

山の神遺跡は昭和50年に市水道局の事業に伴なって緊急発掘調査を実施したが、遺構・遺物の出土は何も無かった。縄文早期・曾利式、弥生後期等の土器片と、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、中世の天目茶碗が表面採集されている。小黒川南原遺跡は表面採集によって梨久保式、曾利式土器片が報告されている。

狐塚北・狐塚南・八人塚古墳は近接してあり、6世紀後半～7世紀前半にかけての群集墳である。狐塚南古墳は昭和50年土取り工事に伴なって緊急発掘調査を実施し、直径14m、高さ2.1mの規模を持った円墳であることが判明した。横穴式石室形態で、底面は亀腹状に小黒川産の円形状花岡岩を整然と配列し、これらの後する地点に川砂をきれいに敷き詰めてあった。この調査で出土した遺物は鉄鎌、刀子、轡、全環、玉、杏葉、土師器、須恵器であった。特に杏葉3枚はその製作技術が優れている点で、現在、伊那市有形文化財考古資料に指定されている。狐塚北古墳は横穴式石室を有する円墳であるが、まだ発掘調査の手は入っていない。盗掘はおそらくうけているであろう。八人塚古墳は以前に発掘調査が実施され、その成果について塙原伝氏が考古学雑誌に発表しており、それを踏えて伊那市史歴史編に掲載してあるから、是非とも御覧頂きたい。平安時代の灰釉陶器移入には東山道が利用され、現在、この地域周辺を通っていたと研究されており話題を投げかけている。小黒川南岸の遺跡については次のように列举しておきます。

（飯塚政美）

12 山本田代遺跡（昭和48年発掘）

（縄文）中期初頭 後期土器 打石斧 磨石斧

（平安）竪穴住居6 小竪穴 土師器 須恵器 灰釉陶器 鉄鎌 刀子 鋼具 鉄滓

（中世）土鍋 陶器（黄瀬戸 天目）

（近世）陶器 青銅製品

13 城平上遺跡（昭和47年発掘）（縄文）中期土器 （平安）土師器 須恵器

14 城平遺跡（昭和47年発掘）

（縄文）竪穴住居1 中期末 後期 晩期土器 磨石 石棒

（平安）竪穴住居8 土師器 須恵器 灰釉陶器 砥石 刀子

（中世）地下倉3 小竪穴2 墓塚4 内耳土器 陶器（黄瀬戸 天目 備前） 青磁 石臼 砥石 刀子 ピンセット状鉄製品 鉤 火打金具 古銭

15 宮林遺跡 (縄文) 中期土器 打石斧 烧石

16 北条遺跡 (昭和49年発掘)

(縄文) 中期竪穴住居 8 中期土塙 4 配石 1 勝坂式 加曾利E式 石鐵 打石斧 磨斧
凹石 磨石斧 刺片石器 砥石 棒状石器 石鍤

(奈良) 竪穴住居 1 土師器 須恵器 陶硯

(平安) 竪穴住居 2 土師器 須恵器 灰釉陶器

17 山本遺跡 (縄文) 中 後期土器 打石斧 (弥生) 土器

18 上島下遺跡 (縄文) 前期土器

19 上島遺跡 (昭和48年発掘) (先土器) 刺片

(縄文) 前期竪穴住居 2 小竪穴 2 前期土器 打石斧 磨石 敲石 石皿 碓器 橫刀形
石器 棒状石器

(平安) 竪穴住居 1 小竪穴 1 土師器 須恵器 灰釉陶器



小黒川周辺地域遺跡分布図 (1 : 20,000)

遺跡の名称

- ①伊勢並
- ②赤坂
- ③富士塚
- ④上ノ山
- ⑤ますみが丘
- ⑥孤塚北古墳
- ⑦孤塚南古墳
- ⑧八人塚古墳
- ⑨山の神
- ⑩小黒南原
- ⑪ウグイス原
- ⑫山本田代
- ⑬城平上
- ⑭城平
- ⑮宮林
- ⑯北条
- ⑰山本
- ⑲上島下
- ⑳上島

地形及び地質

この項については畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区伊勢並遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書（上伊那地方事務所 伊那市教育委員会 1993・3）の第II章第3節「地形及び地質」を全面的に掲載させて頂きました。

1 小黒川扇状地

伊那市の市街地の西方には小黒川扇状地がある。調査地の小黒原はこの扇状地の東半部にある。伊那市の竜西地域はいくつかの扇状地が並んでおり、南から小黒川扇状地・小沢川扇状地・大清水川扇状地・大泉川扇状地という順序に並んでいる。扇状地はそれぞれが特徴を持つものの、特に小黒川扇状地は異質である。

(1) 小黒川扇状地と小沢川扇状地との区別

小黒川扇状地の南扇側部は大部分が権現山（1749m）の山地に接していて、山地と扇状地との区別は容易である。これに対し、北側は小沢川扇状地と接するため両扇状地の境界線を引くことは困難である。中央自動車道を掘り割った時、小黒原を横断する扇状地断面が見えたから、そのとき礫層を観察してあれば境界部を確認できたかも知れない。何故なら、小黒川扇状地礫層中には木曾駒花こう岩の礫が混じっていて区別ができる。今となっては不可能なので小黒原からますみヶ丘、さらに横山にかけて地表の形態を詳細に観察して、両扇状地の境界線を決定した。

西端部の山麓に接する横山では、境界が集落の位置である。これは扇面の等高線の並び方で明瞭に分けられる。ますみヶ丘から小黒原を通って西町に至る広々とした扇状地の上の境界の位置が微妙である。注意して等高線の配列を見ると、一見平坦そのものの扇面の上に一条の微低地が東西方向にのびている。伊那西小学校の校舎の南側を通り、小黒川パーキングの北側を抜け、西町教会の北側の谷に通じる谷線である。西町教会から東では春日城址公園の南側へのびる大きな谷へ通じている。

2 小黒川扇状地の変形

扇状地といえば一般的に河川が山地から盆地に出たところで半円錐形状の地形（扇形の地形）を呈するのが多い。しかし、当地域の扇状地はその趣が異なっている。これは伊那谷が構造性の盆地であって、断層運動と密接に関わりながら発達してきており、扇状地のでき方、その分布を決める要因、扇状地の変形など、断層と深く関わっているためである。

(1) 小黒川断層による扇状地の変形

小黒川扇状地と小沢川扇状地の境界線、及び小沢川扇状地と大清水川扇状地との境界線が縦の手に親ぐ屈曲している。扇端部から1kmほど西へ入ったところである。この屈曲部を連ねて小黒川断層が通っており、屈曲は小黒川断層による変位地形である。この屈曲のずれの向きから、小黒川断層が右横ずれ変位を起こしていることを示している。両屈曲部とも扇状地の境界

線として特徴ある地形を示す。浅い谷ができるが、通常水は涸れている。あたかも首なし川のような谷をなしており、かつて相当に水が流れたような地形である。小黒川扇状地の場合この谷線は4kmにわたって追跡できる。

(2) 扇状地末端部の変位地形について

小黒川扇状地は天竜川に面する扇端部が西町断層によって直線状に切られている。西町断層は小沢川を越え、北に延長し、南箕輪村に達している。伊那市の市街地のある天竜川べりの沖積低地は天竜川の侵食によってのみできたのではなく、西町断層によって生じた構造性の低地帯である。

伊那谷は盆地の中心部を天竜川が流れている。この低地帯は天竜川の侵食作用によって生じた谷ではない。断層を伴ってできた構造性の凹地である。したがって、特別に中央低地帯と呼ぶ。伊那市付近では竜西側の扇状地の末端部が中央低地帯によって切られ、直線状の配列を示している。こうした断層運動は現在まで続いている。その変位速度は大きくなないが、小黒川や小沢川に沿った沖積面にも影響を与えている。

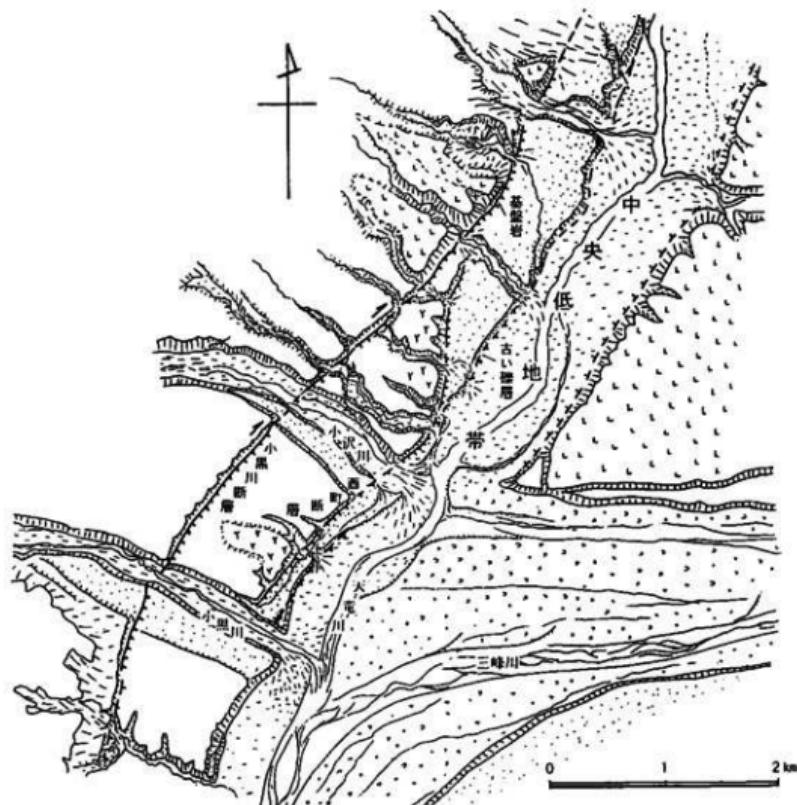
次頁図に伊那市付近の活断層と中央低地帯を示した。天竜川に面した段丘地形の多くは、小黒川断層や西町断層によってできた構造性の段丘であることを示している。断層は、西側が上がり、東側が落ちる動きを持っている。このため、断層より西側に台地状の段丘地形ができる。扇状地の末端部でこうした変位が起こるため、小黒川扇状地も小沢川扇状地も扇端部が一番早く離水し、段丘化する。この証拠として、扇端部に三角形状の台地が生じ、この上に古いテフラ層が風成層としてのっかってくる。こうした地形を変位丘陵と呼ぶ。

変位丘陵には古いものと新しいものがある。古い変位丘陵上には、御嶽第1軽石層から風成テフラ層としてのっている。御嶽第1軽石層は約10万年前に活動した噴出物であるから、古い変位丘陵は10万年前より前にできていたことを示す。南箕輪村神子柴の変位丘陵がそれにあたる。

小黒川扇状地の末端部、城南町西側の変位丘陵は新しい変位丘陵である。この上には、三岳スコリア層から上のテフラ層が風成でのってくる。三岳スコリア層は約6.5万年前の噴出物であるから、それより前に離水したことを見ている。

変位丘陵のまわりの扇状地上には新しいテフラ層しか見られない。小黒川扇状地の大部分はさらにずっと後まで扇状地形成が続いていた。扇状地上にみられる風成テフラ層は御嶽新期テフラ層の最上部のものであることから、6万年前から4万年前ころの期間を通じてだんだんに離水してきたことを示している。小黒川扇状地をはじめとし、伊那市周辺の竜西側扇状地の大部分は6~4万年前、一部では3万年前にかけてだんだんに離水区域が拡大してきたといえよう。小黒川扇状地の先端部に城南町の低位段丘がくっついている。この面上にはテフラ層がなく、姶良Tn火山灰をのせている。

(飯塚政美)



- 断層崖・段丘崖にかこまれた段丘状地形
- 新断層（接曲面）をつくる活断層の推定部分
- 新断層（接曲面）をつくる活断層。短線の向きが崖下を示す
- 支流の押し出しと中央低地帯の低湿地
- 三峰川が現在つくりつつある扇状地
- 2万年前後の低位段丘
- 6～4万年前にできた扇状地や段丘
- 三峰スコリア（6、5万年前）を風成でのせている変位丘陵
- 脱氷第1氷石層から風成テフラ層をのせている変位丘陵

伊那市付近の活断層分布と中央低地帯

例　　言

1. 本書は、平成6年度に実施された畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区に伴なう埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は、上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成6年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　　飯塚政美

◎図版作製者

・遺構及び地形実測図

友野良一　　飯塚政美

・拓影	友野良一	飯塚政美	本田秀明
・土器・陶器実測図	友野良一	飯塚政美	
・鉄製品実測図	友野良一	飯塚政美	
・石器実測図	友野良一	飯塚政美	

◎写真撮影者

・発掘及び遺構	友野良一	飯塚政美
・遺物	友野良一	飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。

6. 出土遺物・遺構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

伊勢並遺跡

目 次

序
例 言
目 次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	5
第1節 発掘調査に至るまでの経緯.....	5
第2節 調査の組織.....	5
第3節 発掘調査日誌.....	6
第Ⅱ章 調 査.....	9
第1節 調査の概要.....	11
第2節 造構と遺物.....	11
(1) 縄文時代の造構.....	11
(2) 縄文時代の遺物.....	17
(3) 平安時代の造構と遺物.....	34
第Ⅲ章 所 見.....	41

挿 図 目 次

第1図 地形及び遺構配置図	9
第2図 第1号住居址実測図	12
第3図 第3・4・5号住居址実測図	13
第4図 第6・7・8・9号住居址実測図	16
第5図 第1号住居址出土遺物	17
第6図 第3号住居址出土土器拓影	19
第7図 第3号住居址出土遺物	20
第8図 第4号住居址出土土器拓影	22
第9図 第4号住居址出土遺物	23
第10図 第5号住居址出土遺物	24
第11図 第6号住居址出土土器拓影	25
第12図 第6号住居址出土石器実測図	26
第13図 第6号住居址出土石器実測図	27
第14図 第7号住居址出土土器拓影	29
第15図 第7号住居址出土遺物	30
第16図 第8号住居址出土遺物	31
第17図 第9号住居址出土遺物	32
第18図 遺構外出土遺物	33
第19図 第2号住居址実測図	34
第20図 第2号住居址出土遺物分布図	35
第21図 第2号住居址出土遺物実測図	36
第22図 第2号住居址出土遺物実測図及び拓影	38
第23図 第2号住居址出土遺物実測図	39
第24図 第2号住居址出土遺物実測図	40

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景	図版5 遺構及び遺物出土状況
図版2 遺構	図版6 遺物出土状況及び記念撮影
図版3 遺構	図版7 出土遺物
図版4 遺構	図版8 出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった伊勢並遺跡は畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区に伴なう緊急発掘調査であった。調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行なわれ、それらを流れに添って記しておく。

平成5年9月16日 伊那市役所会議室で前述した事業の平成6年度分埋蔵文化財保護協議を徹底的に行うが、この時点では実施計画がまだ明確ではなかった。従って、計画が確定した後にもう一度、話し合いを持ったことにした。当日の出席者は長野県教育委員会文化課指導主事、上伊那地方事務所土地改良課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員であった。

平成6年5月16日 実施計画が確定されたので、上伊那地方事務所会議室で今後の進め方と予算面について協議を実施した。この協議で発掘調査は一作収穫した11月上旬頃から始めること、費用は200万円（土地改良課150万円負担、地元負担分50万円）と決定した。出席者は上伊那土地改良課職員、伊那市教育委員会教育課職員であった。

平成6年9月下旬 埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書締結までの事務手続きを話し合い着工が順調に進むよう地権者の同意を得る。

平成6年10月4日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成6年10月12日付けて、上伊那地方事務所長より畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区における発掘調査の計画書・経費についての提出依頼がある。

平成6年10月18日付けて、伊那市長から上伊那地方事務所長へ埋蔵文化財発掘調査実施計画書及び発掘調査見積書を提出する。

平成6年11月4日付けて、畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を上伊那地方事務所長三浦太家男、伊那市長唐澤茂人両者間で締結する。

平成6年11月7日付けて、伊那市長唐澤茂人と市内遺跡発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を取りかわす。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長 小田切 仁

委員長代理 小坂栄一

委 員 岸 敏子

" 小松光男

教 育 長 宮下安人

教育次長 有賀博行

事 務 局 新井良二 (社会教育課長)

" 林俊宏 (社会教育係長)

" 大久保律子 (青少年教育係長)

" 上田延明 (青少年教育主査)

" 飯塚政美 (社会教育課主査)

" 有賀恵 (社会教育課主事)

発掘調査団 (伊勢並遺跡)

団 長 友野良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚政美 (")

" 本田秀明 (長野県考古学会会員)

" 松島信幸 (第四紀学会会員)

" 寺平宏 (")

作業員 柴佐一郎 小松孝臣 小田切守正 有賀秀子

大久保富美子 酒井とし子 溝上美弥子 福沢幸一 (敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成6年11月8日 伊那市考古資料館にて発掘器材の整備を行い発掘調査に備える。午後、同館より小黒原の現場まで発掘器材一切を運搬する。

平成6年11月9日 発掘現場に休憩用のプレハブを建てて。

平成6年11月10日 幹線道路の幅杭確認を実施し、幅杭を連結してビニールテープを張り付けて、境界線を明確にした。

平成6年11月11日 幹線農道(8-42号)の南側、現道の東側を掘り下げていくと、随所に黒い落ち込みが見られた。縄文中期土器片、平安時代の土師器片、灰釉陶器片が相当量出土した。調査地区一帯は複合遺跡となっていた。

平成6年11月12日 昨日に引き続きトレンチ掘りを北へ北へと進めていくと、南北に長く黒い落ち込みが認められ、住居址の可能性が強く、3軒の切り合いが想定できた。縄文中期土器

片が多量に出土した。東西に走る舗装された幹線農道を横切って北側へトレンチ掘りをしてみると方形状の黒い落ち込みがあった。

平成6年11月14日 昨日、検出された方形状の落ち込み遺構の平面プランを掌握する南北に走る幹線農道(支道8-42号線)をトレンチ状に掘り進めていく。表土面から30cm位下った面でソフトテフラ層に達するが、遺物の出土は全く無かった。このことで、伊

勢並遺跡の範囲がある程度把握できた。このトレンチを掘った場所は菊れ草が繁茂しており、調査にかかるまでの準備が大変であった。

平成6年11月17日 8-42号路線の北側で検出された方形状の落ち込みを第1号住居址と命名し、掘り下げを開始し、夕方までかかってほぼ全掘しあえる。床面直上の覆土より波状に縁を呈し、溝手で、隆帯を貼り付け、爪形文を有する珍らしい土器片が出土した。この住居址の決め手となる土器であり、当夜、家に帰り調査してみることにした。

平成6年11月18日 昨年、検出した奇妙な土器片は五領ヶ台I式と判明した。第1号住居址



発掘風景（耕土は重機にて剝ぐ）



（支道8-41号線）のトレンチ掘り終了
(ソフトテフラ層まで30cm位で達する 遺物の出土は全く無し)

のセクション図を作製し、セクションを掘り下げ、清掃を終え、写真撮影を済せる。ただちに平面実測を完了する。東西に走る幹線農道の南側、8-42号路線の西側を重機にて拡張する。

平成6年11月21日 第1号住居址のレベル測量完了。8-42号路線の南側で検出された方形状の落ち込みを第2号住居址と名付ける。この住居址の中央付近に30m位の幅でベルトを残して掘り下げを開始する。掘り下げていくと、かなりの量の土師器、須恵器、灰釉陶器片が出土した。灰釉陶器は黒窯90号窯産が多く、平安時代中期の竪穴住居址となった。主な出土遺物として土師器耳皿1点、鐵鎌2本であった。

平成6年11月24日 第2号住居址のベルト実測終了。同住居址の掘り下げを続行していく。

平成6年11月25日 前日同様に第2号住居址の掘り下げを進行していくと、床面はいたるところで貼り床状に成っており、調査に困難をきわめた。第2号住居址のカマドのカッティングをする。

平成6年11月28日 第2号住居址の清掃を終え、写真撮影をする。第2号住居址カマドの断面実測終了。同時に、同住居址の平面実測。8-42号路線の最南端の落ち込みプランを確認し掘り下げを進める。掘り下げていくと曾利II式の土器が床面に密着して出土し、第3号住居址とする。この住居址の床面を丁寧に掘り下げていくと、南側から東側にかけて切り合い関係になつておらず、新たに住居址が発見され、第4号住居址となる。従つて、第3号住居址を第4号住居址が切っている状況であった。

平成6年11月29日 第2号住居址の平面実測、カマドの実測をそれぞれ済せる。第3~4号住居址を掘り下げ、柱穴の半カットをし、断面実測を終える。床面上に出土している土器をドットマップして取り上げる。両住居址とも炉の位置が確認できた。

平成6年11月30日 第3~4号住居址の完掘を終了し、写真撮影を終える。第4号住居址の南側を精査していると円形状の黒い落ち込みがみられ、第5号住居址とする。掘り下げていくと住居址の東側入口付近に平坦な石があり、その下に正位の埋甕が発見された。第5号住居址は浅かったので完掘を夕方までに終了し、清掃を終え、写真撮影を済せる。第3号住居址、第4号住居址の実測を開始する。

平成6年12月1日 第4号住居址、第5号住居址の平面・断面実測終了。第5号住居址の埋甕をとりあげる。長く黒い落ち込みがあった場所を掘り下げていくと石囲炉が発見され、第6号住居址とする。

平成6年12月2日 第6号住居址の柱穴断面図を作成、午後、本住居址完掘、同時に平面実測を進める。第6号住居址の北側に第7号住居址が発見される。

平成6年12月3日 第7号住居址の掘り下げ開始。第6号住居址の写真撮影、実測の終了。

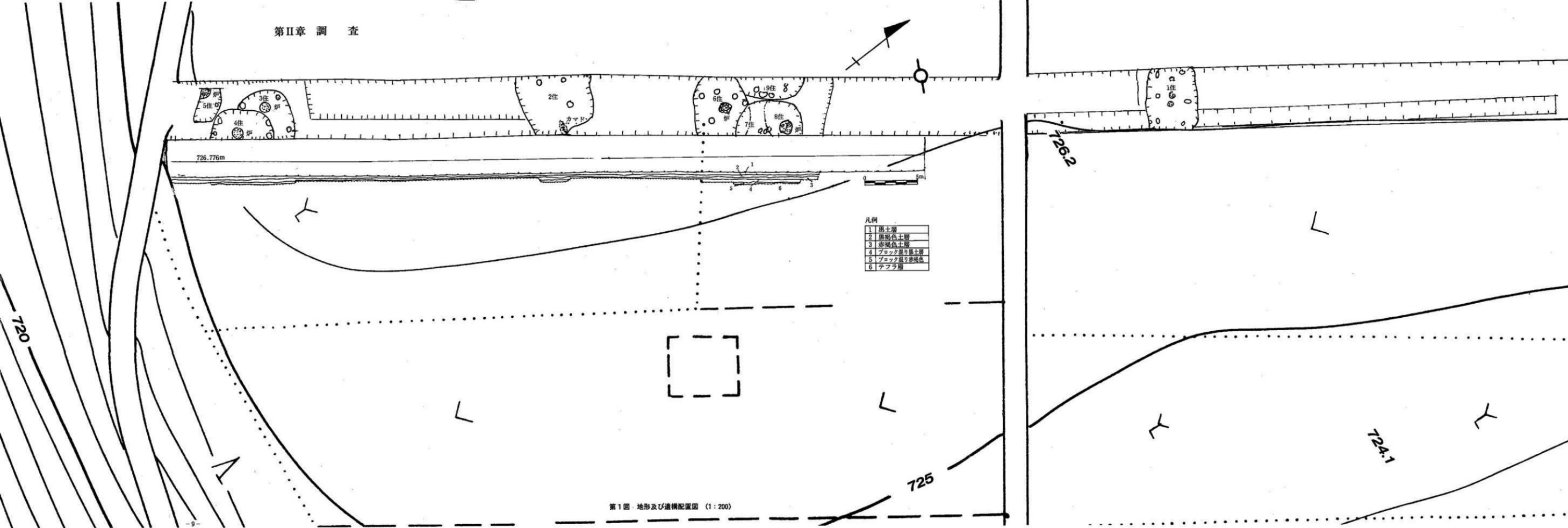
平成6年12月5日 第7号住居址~第9号住居址の完掘、写真撮影、実測、全測図の作成。

平成6年12月~平成7年3月 遺物の整理、図版の作製、報告書を印刷所へ送る。

平成7年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

第II章 調 査





第1節 調査の概要

伊勢並遺跡は現在、畠地、原野、山林に利用されており、開発化への進行度は純化状態であった。これは農業振興法の網が厚く掛けられている現象である。現状は前述したような土地利用のため、遺物の散布状況を詳細に把握できたので、それに基づいて本調査に取りかかったがその調査範囲は道路幅5.5mと限定された区域であった。

畠地帯の耕作土は耕作による擾乱の為、また、かなり厚く覆っていたことから重機によっての耕作土剥ぎを実施した。調査の結果－縄文中期初頭の住居址1軒、縄文中期中葉の住居址2軒、縄文中期後葉の住居址5軒、平安時代中期の住居址1軒が検出され、これらの遺構に伴なつて相当量の遺物が出土した。

遺物のうち、土器・陶器に限って見てみよう。特に土器については縄年による追求をこころみると縄文早期末葉の茅山上層式、天神山式、縄文中期初頭の五領ヶ台式、梨久保式、平出ⅢA式、縄文中期中葉の藤内式、井戸尻式、勝坂式、縄文中期後葉の加曾利E式、曾利式が見うけられた。土師器に関しては全て平安時代中期に含まれており、それらに伴出して須恵器、灰釉陶器が出土している。

第2節 遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構

第1号住居址 (第2図 図版2-4)

本址は発掘調査地区の内で北側に含まれた位置に発見され、東側と西側は用地外の為に発掘調査は不可能であった。西側で、表土面より90cm位下ったソフトテフラ層面を掘り込み構築した竪穴住居址であり、平面プランは前述したように東、西側は不明の為詳細な事は察知できないが、現出しているプランより四隅がやや丸味を呈する隅丸長方形を成していると思われる。

規模は南北4m60cm位、(東西は不明)を測る。検出面での壁高は15cm~20cm内外と低く、やや外傾気味で、若干の凹凸を認めた。床面は大般平坦で、ところどころに堅い叩きが設けられており、できばえは普通であった。

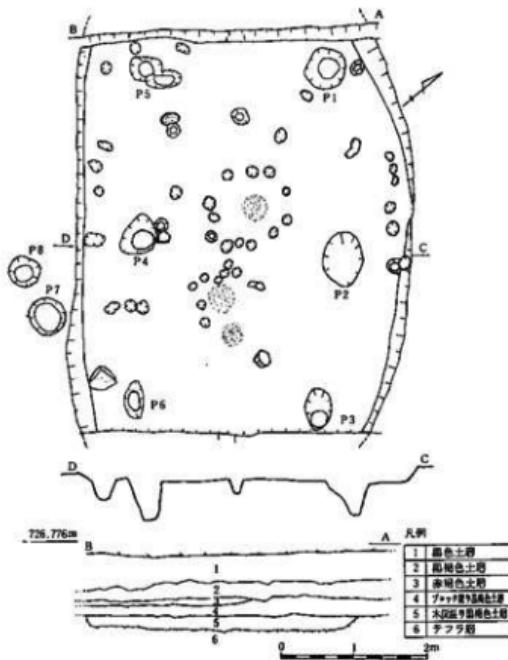
床面上に多数のピットが発見されたが、そのうち主柱穴と成り得るのはP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₆の6本であり、これらのうちP₁、P₂、P₃とP₄、P₅、P₆はそれぞれ直線状に配列されており、墨根架けは切妻的であつただろう。炉は床面中央部付近よりわずか北側にあり、その規模は南北30cm位、東西35cm位で円形状に赤々と焼土が厚く堆積していた。いわば地床炉の形態を有している。本炉よりわずかに離れた南東の床面上に円形状の焼土集中点が2カ所検出した。

遺物は縄文中期初頭に縄年づけられる五領ヶ台I式、梨久保式土器片が床面直上より少量検出され、よって本址もこの時期に位置づけられよう。

第3号住居址 (第3図 図版2-4)

本址は発掘調査地区の内で最南端部の位置に発見された遺構で、北側から西側にかけて第4号住居址に切られ、東側は用地外のため発掘調査は不可能であった切り合い関係のため、本址の全貌は不明であるが、調査可能な場所での成果からみて、ソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址であり、プランは円形状を呈している。本址のように幅5.5m内で検出されるケースは極めてまれであり、貴重と思われる。

規模は構築当時南北



第2図 第1号住居址実測図

5m位、東西5m位を測定可能であっただろう。壁高は30cm~40cm位を有し、やや外傾気味で、良好な状態であった。床面は大般平坦で、堅く叩いてあり、特に、炉周辺の硬度は高かった。北側から西側にかけての壁面直下に幅8cm~15cm位、深さ10~15cm内外の周溝が廻っていた。

柱穴は4本主柱穴と思われ、今回の調査で検出されたP₁、P₂、P₃は直径60cm~70cm位、深さ70cm前後を測定でき、良好な主柱穴となり得る。炉は住居址の中央部付近にタライ状に掘り込んで聚いてあり、南北1m65cm位、東西1m30cm位、深さ50cm位を測定できた。炉底には焼土が多量に堆積し、目にも鮮やかに赤々と光沢を放っていた。炉の周辺に散在している石は炉石に用いられたものであり、石質は全て花崗岩であった。

炉を中心にしてNaを入れてあるのは本住居址の時期決定に関連した土器であり、これらを総合してみてみると、全て縄文中期後葉に含まれ、従って本址も同時期に該当すると思われる。

第4号住居址（第3図 図版 2 4）

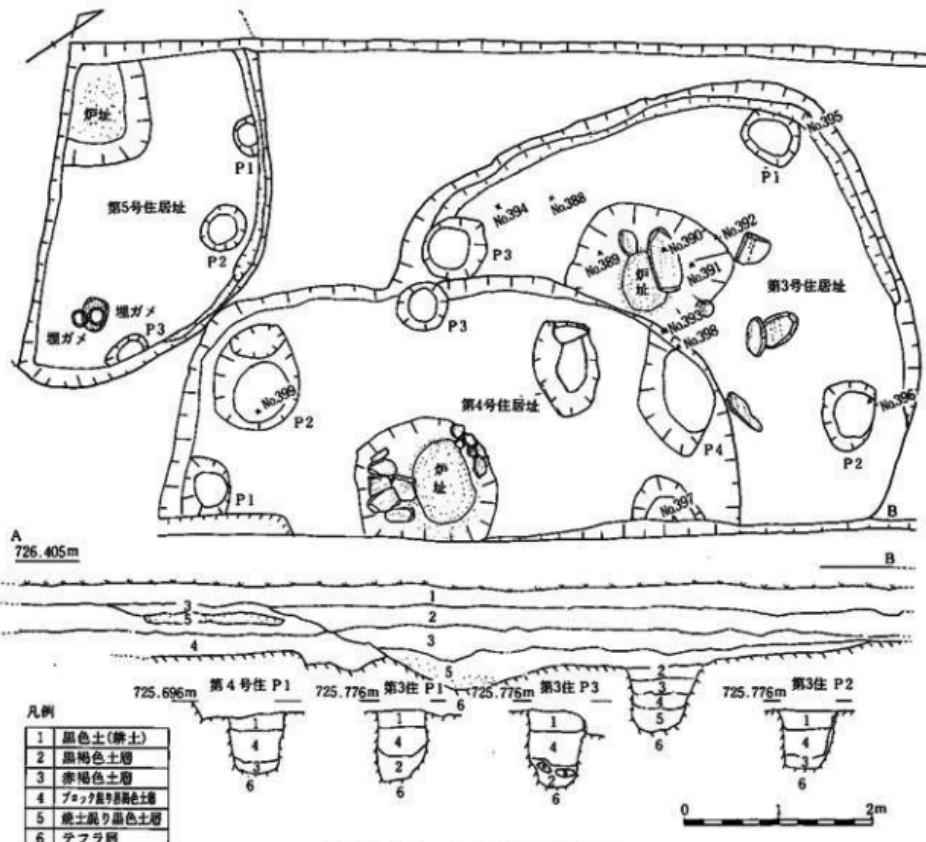
本址は北側から西側にかけて第3号住居址を切って検出され、従って、第3号住居址より新しい時期に属している。第3号住居址同様、ソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址である。東側の半分は用地外の為に調査は不可能であり、検出された西側半分の様相を述べていく。

プランは現段階で見て円形状を呈し、直径5m~80cm位を持ったやや大き目の住居址である。

壁高は15cm位～30cm位と、やや低目で、同時に外傾気味であった。壁面は大般平坦で、良好状態を保っていた。床面は多少の凹凸はあったが、全般的みて、ほぼ平坦で、堅く踏み固められていた。柱穴は6カ所確認されたが、全掘すれば8本主柱穴となるのではないか。

炉は床面の中央部付近に発見され、タライ状に掘り凹めて築いてあり、南北1m50cm位、深さ45cm位を持ち、やや大き目であった。炉壁には人頭大程から拳大程の花崗岩や变成岩の河原石を貼り付け、崩壊を防いでいた。長期間使用したとみて、炉底には多量の焼土や炭化物が厚く堆積し、誰が見ても炉と判断できる状況下となっていた。

炉周辺の床面には相当量の焼土が確認され、炉内の灰をかき出して、すぐ近くに置いた残存物の確認であろう。本址は出土遺物から見て縄文中期後葉の住居址と思われ、さらに細分化が必要となってきている。



第3図 第3・4・5号住居址実測図

第5号住居址（第3図 図版2）

本址は今回の調査地区最南端の一隅に発見された遺構で第4号住居址と近接している。表土面から70cm位下ったソフトローム層面を掘り込んだ竪穴住居址である。西側と南側は用地外のため発掘調査は不可能であり、本住居址の調査面積は全体の四分の1程度に留まり、従って、本文記述にあたり、想像する比重が高くなつた。

プランは推測であるが、円形状で、規模は直径6m程度とそれぞれ考えられる。壁高は北側で20cm程度、東側で10~15cm内外をそれぞれ測る。床面は大般平坦であり、やや軟弱気味であった。また、同面の北壁直下に幅8cm~15cm程、深さ10cm位の周溝が巡っており、住居址としての機能を備えていた。柱穴は北壁から東壁にかけて3本確認されたが、全面発掘すれば、現状柱穴の間隔からみて8本位検出されるのではないだろうか。

直径1m位、深さ60cm位の規模で大きな凹みをつくり、それを炉として使用していたとみて、凹みの中に多量の焼土と木炭が検出された。東壁近くに二つの埋甕が正位の状態で出土。その内、北側のは口縁直上に薄い円形平板状の緑色岩を蓋石状に置き、一般的に見られる埋甕と大差はなかった。この蓋石のレベルは床面とはほぼ同一レベルであった。南側の埋甕口縁は北側のそれより5cm位下ったレベル面に存在していた。

二つの埋甕より見て本址は縄文中期後葉の住居址と思われる。

第6号住居址（第4図 図版3~4）

本址は南側で第2号住居址に近接し、北側は第9号住居址を切り、北東のほんの一部分は第7号住居址の上に貼り床をして床面を大般平坦にしてある。表土面より50cm位下ったソフトテラ層面を掘り込んだ竪穴住居址であり、東側と西側が用地外のため発掘調査は不可能であったが、調査を実施した部分から推定して円形状を成すと思われる。規模は直径5m~30cm位を測定できよう。

壁高は20cm~30cm位で、やや低目を示し、状態は外傾気味を成していたが、残存状況は良好であった。床面は大般平坦であったが、やや軟弱気味を呈していた。ピット番号を付けてあるのが主柱穴で他のピットは本住居址とは何も関係はなかった。これは床面を精査していくと全て貼り床状になっていた。P₁は直径45cm位、深さ47cm位、P₂は直径68cm位、深さ35cm位、P₃は直径48cm位、深さ58cm位、P₄は直径45cm位、深さ45cm位、P₅は直径1m位、深さ50cm位をそれぞれ測っている。

炉は南北1m~25cm位、東西95cm位の大型の円形状石囲炉で、7個の石を組み、その美感を保っていた。炉壁面はソフトローム層に築かれ、断面はやや凹凸のある摺鉢型を呈し、炉内全面にわたって赤々と焼土が厚く堆積していた。

本址は出土土器からみて縄文中期後葉に位置づけられよう。前述したように床面上に多数存在している穴ボコは覆土中より木の根が多量に出土し、風倒木の可能性が強いものと思われたり、貼り床状況からみて、本址とは直接関係ないと想定でき得よう。

第7号住居址（第4図 図版3～4）

本址は南側で第6号住居址に接し、北側で第8号住居址に切られた位置に検出された竪穴住居址である。プランは東側は用地外、その他の面は切り合い関係等々によって、その全体像は掌握できなかつたが、コーナーの一部から見て、円形状を呈するのであろう。このコーナーの曲がり具合から見て規模は直径4m前後と思われる。

柱穴は現段階で4ヵ所検出されたが[†]、その実態は不詳な点が多い。床面はやや堅く踏み固められ、大般平坦であった。

炉は住居址の中央部よりやや北側に寄った位置に設置され、東側に河原石を添えた埋甕炉であった。埋甕は正位の状態で埋設されており、上部、下部ともに欠損していたが、かなり良好な状態で残っており、いわば廢品を第二次的に利用した確たる実例の一つであろう。

この埋甕炉に使用された土器は縄文中期中葉の前半に位置づけられよう。この時期の出土遺物はセット的になる場合がある。

第8号住居址（第4図 図版3）

本址は第6号住居址、第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址の四軒が[‡]切り合い関係にある住居址群中の最北端部に検出された住居址である。東側は用地外のため発掘調査は不可能であったが、北側から西側にかけてのプランより想して円形平面プランを呈すると思われる規模は直径4m位を測定可能であろう。本址と第7号住居址の境にはほとんど段差がないが[§]第8号住居址埋甕付近が新旧の境と察せられる。この埋甕編年からみて、第8号住居址が第7号住居址を切っている形態となる。

壁高は20cm～25cm位と浅く、やや外傾気味で、壁面は若干凹凸していた。床面は大般平坦で特に炉周辺は堅い叩き状態であった。ピットは數ヵ所検出されたが、主柱穴となり得る条件を有しているのはP_s、P_t、P_uであり、それぞれの数値は次の通りとなる。P_sは直径45cm位、深さ55cm位、P_tは直径55cm位、深さ65cm位、P_uは直径40cm位、深さ65cm位。これら3本の柱穴はほぼ等間隔に規則正しく配列されており、全体として本址は4本主柱穴形態であろう。

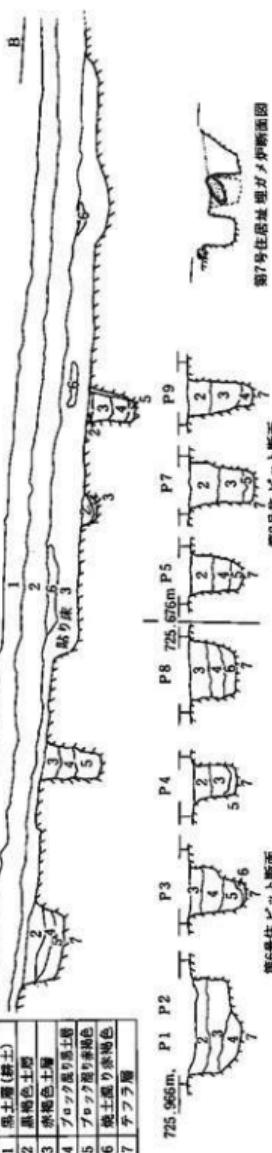
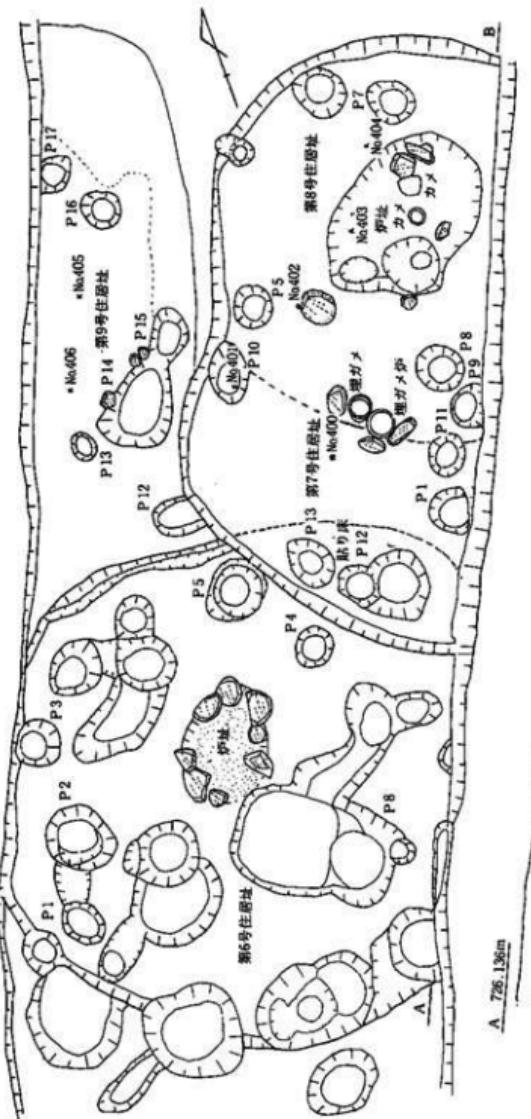
炉は床面中央部よりやや北側によつた位置に発見され、南北1m70cm位、東西1m60cm位の規模で床面を大きく鉢状に掘り凹めて築き上げてある。炉の北壁と東壁に礫が散在していたが、壁面の崩壊を防ぐための一工夫であろう。また、同時に炉内に多量の土器片が発見され、なかには本住居址の時期決め手となり得るのも含まれていた。縄文中期後葉に位置づけられる。

第9号住居址（第4図 図版3）

本址は第7号住居址、第8号住居址の西側に検出され、西側は用地外のため調査不可能。調査を進行していく段階で、極めて良好な床面が発見され、住居址となった。その他、掘り込み面、壁の状態、炉の形態は判然としない。

第4図中で第9号住居址床面上に記載してあるNo405、No406の出土土器からみて、本址は縄文中期中葉の住居址と思われる。

（飯塚政美）



第4図 第6・7・8・9号住居地断面図

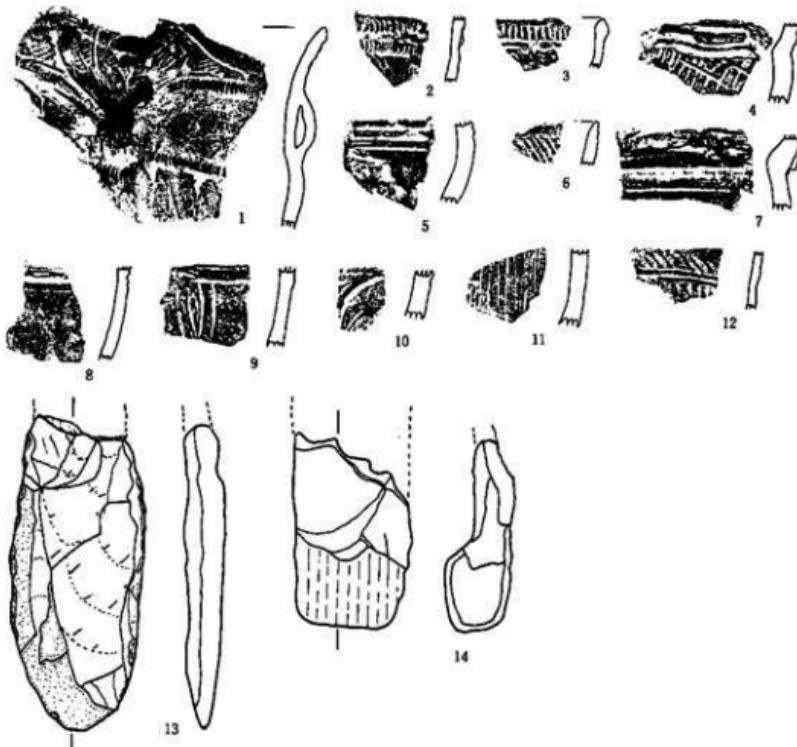
第7号住居地 塵ガメ焼削面図

(2) 調文時代の遺物

(a) 第1号住居址出土遺物 (第5図 図版5)

本址より出土した遺物はここに掲載した土器片12と石器2であった。全般的にみて土器片は中厚手に属している。色調は黒褐色(1 2 4 6 8 11 12)茶褐色(3 9 10)赤褐色(5 7)を呈し、焼成は全片とも良好である。(1)は波状口縁を呈する口縁部破片であり、文様帶は三分帯になる。上部文様は口唇直下に波状に沿って連續爪型文を、その下を沈線による三角形状区画文を構成し、その中に細い斜繩文や刺突文を施してある。中部文様は横位に走る隆帶を貼り付け、その上に連續爪形文を押捺し、縦位の橋状突起を付け加え、文様変化をこらしている。下部文様は横位連續爪形文と縦位沈線文によって成立している。

他の11片を主体文様によって分類すると次のようになる。隆帶を貼り付け、その上に連續爪形文を施してあるもの(2 3 7)、斜繩文地に沈線を複雑にからみあわせ文様効果を増し



第5図 第1号住居址出土遺物 土器拓影(1~12)1:3 石器実測図(13~14)1:2

ているもの（9 10 12）、沈線が縦位、横位、斜目状に交叉しているもの（4）、沈線が斜目状のもの（6）、縦位沈線文のもの（11）、沈線が横位に数条施されているもの（5 8）これら12片は全て縄文中期初頭に位置づけられ、（1）に限っては五領ヶ台I式に細分可能である。（13）は短冊形の打製石斧で緑泥岩を、（14）は定角式磨製石斧で、（13）同様に緑泥岩を用いて製作している。

（b） 第3号住居址出土遺物 （第6～7）

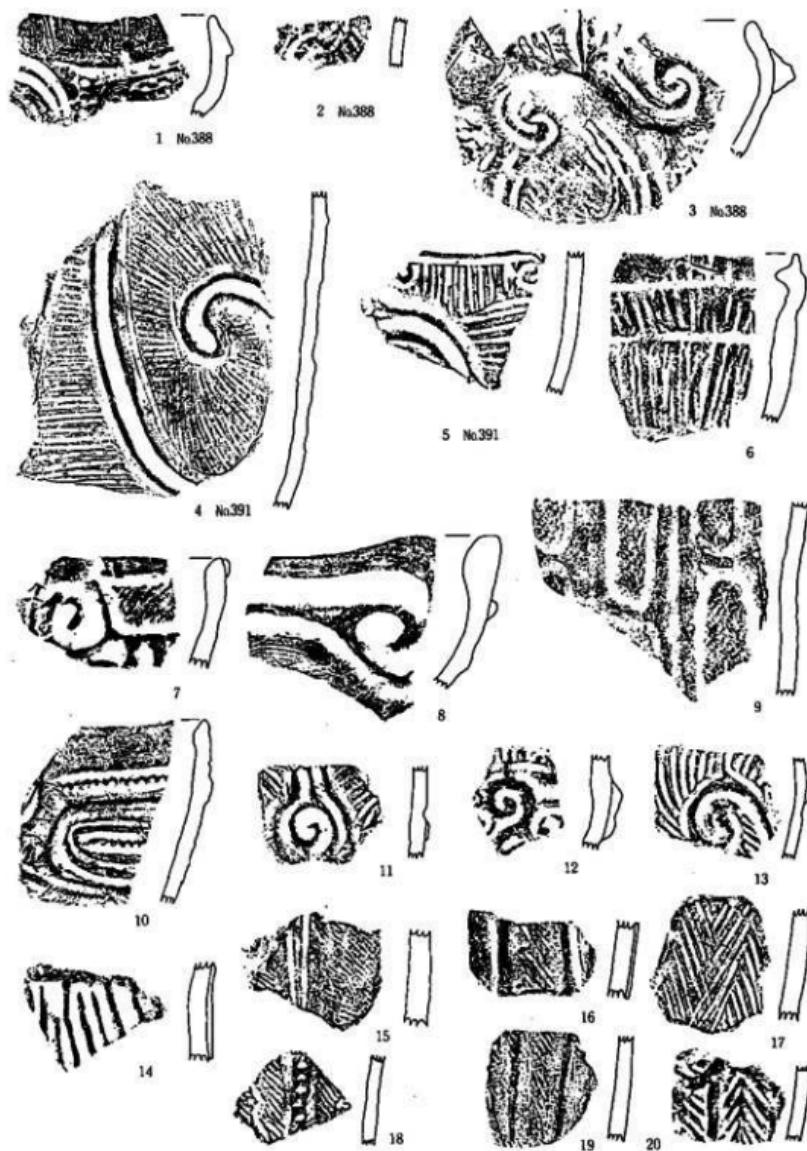
本址からは相当量の土器片が出土したが、全体的な文様傾向は第6図に掲載した20片にて集約可能であり、これらは全て縄文中期後葉に含まれている。（1～3）は割合に集中して出土しており、同一固体と思われる。色調は赤褐色（1～3 10 15 16 20）、茶褐色（4～5 7 8 13 19）、黒褐色（6 9 11 12 14 17 18）をそれぞれ呈し、焼成は全般的に良好であった。

次に文様構成を見てみよう。（1～3）は無文地へヘラによる幅広の沈線を弧状に描き、ところどころに低い粘土紐を貼り付け意匠をこらしている。（3）にいたってはその隆帯が極めて高く、意風堂々としており、結末は渦巻文の体裁をとっている。（4～5）は同一固体であり、文様は極めて簡素な作りであり、沈線と粘土紐の貼り付けを巧みに組み合わせて文様構成をしている。

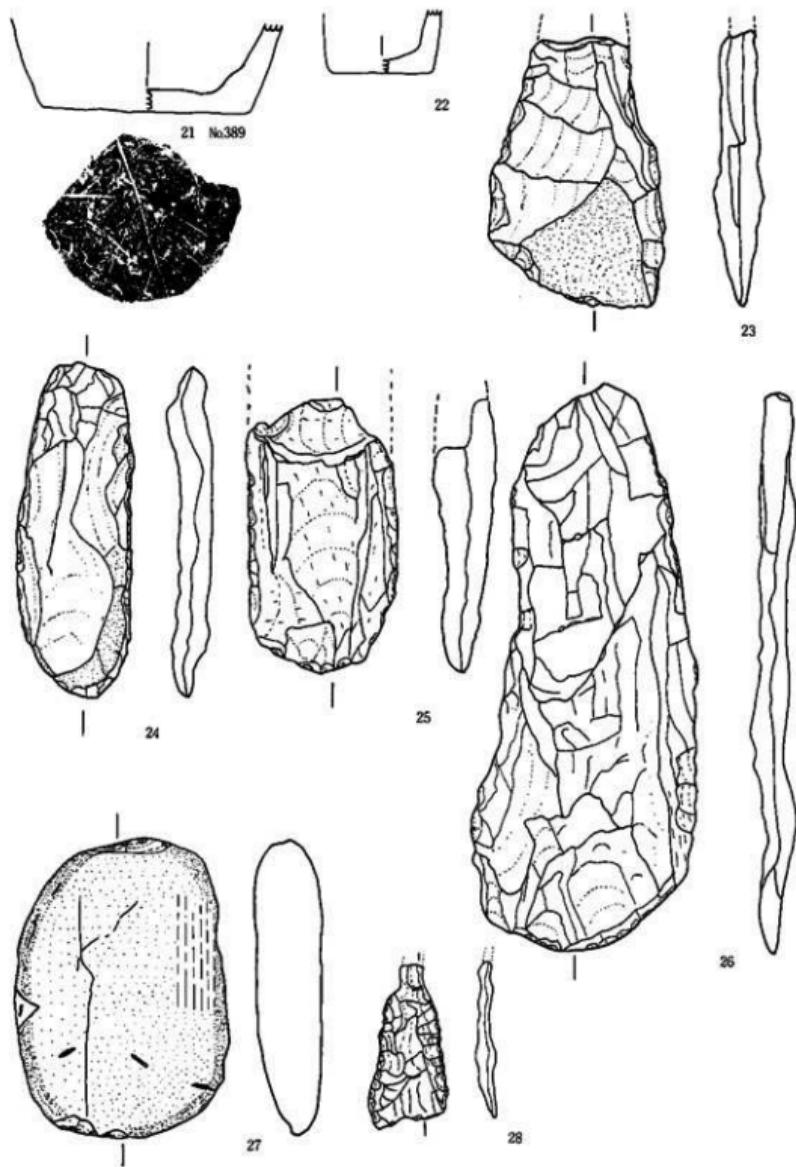
（6）は口唇部は丸味状を呈し、口縁内側にわずかに段を有し、内傾する口縁部破片である無文地に縦位の沈線を垂下させ、アクセント的に横位の沈線を2本配す。これが全体的に見て文様区画帯となっている。（7～8）は縄文の下地へ粘土紐を貼り付け、これが渦巻状を呈し目をうばうものがある。（9）は斜縄文地へ幅広ろで、浅い沈線を垂下させたり、弧状に工夫して配し、一種独特的の区画文風を作り上げている。

（10）はよく知られている變型土器の口縁部破片である。低い隆帯をコ字状に配し、その中に沈線を横位や弧状に施し、その縁に沿って刻目を付け、変化を富ませている。（11～13）は無文地に渦巻状隆帯を破片の中央部に付け、その周囲に斜状沈線文を配している。（14）は無文地に単にソウメン状粘土紐を貼り付けてあり、最も簡素な文様である。（15）は細かな斜縄文地へ沈線を三本束状に垂下させてある。（16 19）は斜縄文に低い隆帯を2本並走させ、文様としての面目を保っている。

（17 20）は綾杉文様の顯著なもので、（20）は文様効果を増すため隆帯懸垂文を加飾してある。（18）は斜縄文地へ沈線を垂下させ、その間に点列文が見受けられる。（21～22）は底部破片であり、（21）は木ノ葉を押捺してある。（23～28）は石器を掲載してある。（23）は撥形の打製石斧で、硬砂岩を用い、上端部は欠損している。（24）は短冊形の打製石斧で、緑泥岩製である。（25）は短冊形の打製石斧で、緑泥岩製、上端部は欠損している。（26）は撥形の打製石斧で、粘板岩を用い、大型石斧類に含まれる。（27）は硬砂岩を利用した磨石である。（28）は赤チャートを利用した撥形石匙で、つまみ部分がわずか欠損している。



第6图 第3号住居址出土土器拓影(1:3)



第7図 第3号住居址出土遺物 土器実測図(21~22)1:3 石器実測図(23~28)1:2

(C) 第4号住居址出土遺物 (第8~9図)

本址の発掘調査部分は前述したように西側半分だけであったが、その遺物出土量は相当数に達した。従って、全面発掘を実施したならば漢大な量の遺物が出土すると思われる。土器の主流は第8~9図にかけて掲載したグループに大別され、これらは全て縄文中期後葉に編年づけられる。色調は黒褐色(1~3 8~9 13 17 19)、赤褐色(4)、その他の破片は茶褐色をそれぞれ呈する。全般的にみて焼成は良好で、どの破片にも多量の長石を含有し、器面に白々と細粒が認められる。(9)の外面には良く煮沸をした証しとなる炭化物が多量に付着し、黒々と光沢を放っていた。

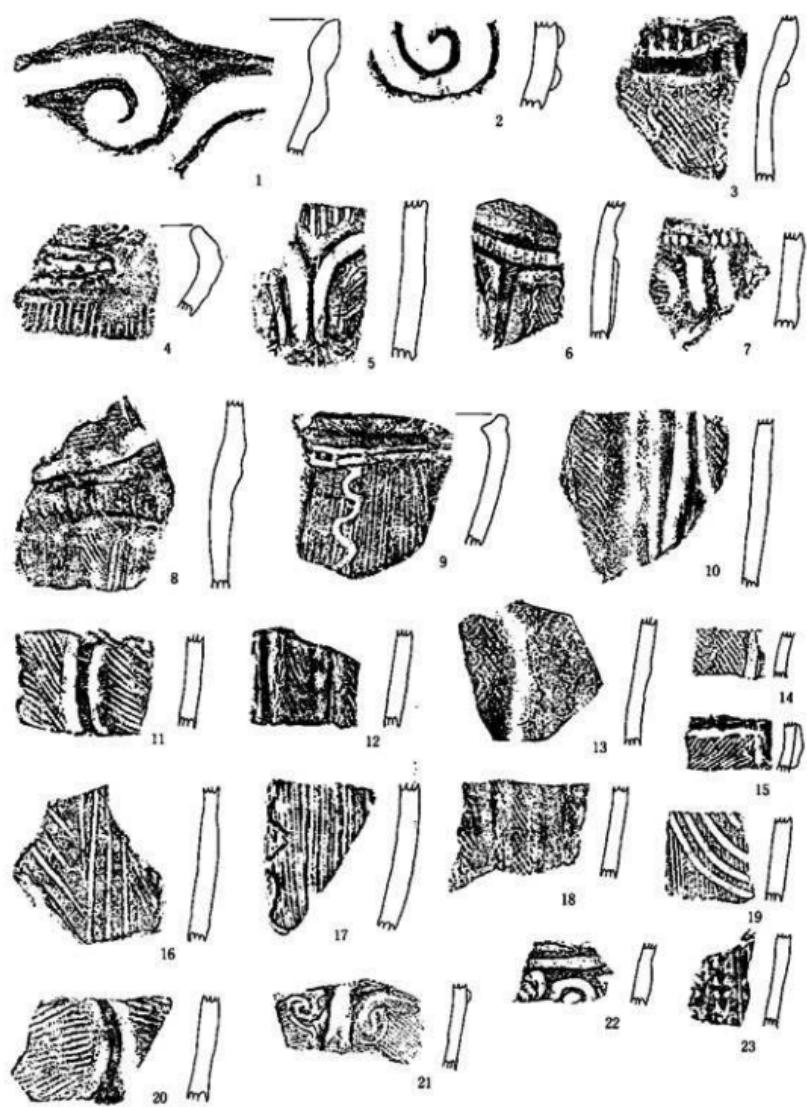
次に主なる文様の特色を記す。(1)は口唇が丸味状を呈し、やや波状を成す口縁部破片で、無文地に太い隆帯渦巻文を配している。これに対して(2)はソウメン状の渦巻文を付加している。(3 6 8)は隆帯の縁に無雜作に刻目をつけてあり、これが文様のイメージアップを成している点が興味深い。(5)は無文地に隆帯を弧状に四本貼り付けたり、細片のため、その統一性は正確に把握できないが、現段階で察するに最終的には渦巻文様を構成するのであろう。

(7)は破片上部に円形点列文を横走させ、中・下部はヘラによる浅目の沈線を垂下させ、二つの文様接点は直角状を呈する。(9)はやや内反する口縁で、口唇は内そぎを呈す。先端が鋭角な施文具による細沈線を無数垂下させ、これがいかにも地文的効果を成し、中央部付近に蛇行状沈線を組み合せ、全体的に美感を増す意匠をこころみている。(17)は文様構成から見て(9)と同一固体と想定される。

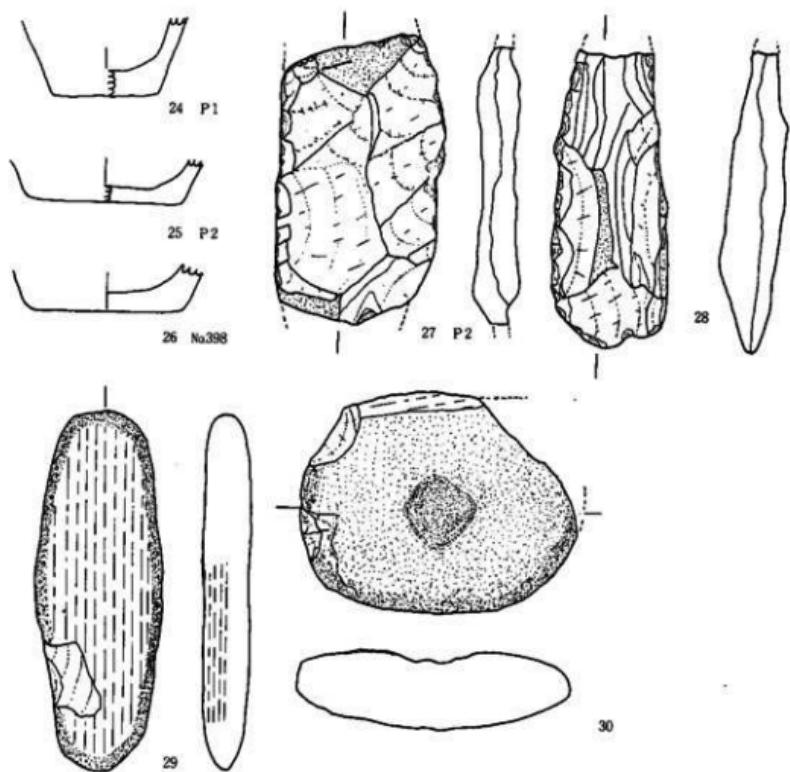
(10 13)は斜縄文地に幅広ろの沈線状懸垂文を施す。(11 20)は同一固体であり、斜縄文地に弧状隆帯を貼り付け、それの両側に沈線がカーブ状に描出されている。両片とも多量の螢母を含有し、目にも鮮明にピカピカ光っている。(12 18)は細かな斜縄文の上に低く、細い隆帯状懸垂文を加節させ、文様スタイルを整備している。

(15)は縄文が細かな地文の上に細い隆帯を縱位と横位に配し、この二つの隆帯によって区画文帯が形成され、土器編年細分の有力な決め手となろう。(16)は縄文中期後葉のうちでも後の方に位置づけられている綾杉文様が見事に発達している。(19)は細かな沈線を地文とし、その上に幅広ろの沈線をほぼ同心円状に配している。この施文方法を研究すれば大きなテーマが浮き上がってくるであろう。

(21 22)は沈線文をクラビ平状に配する。(24)はP₁、(25)はP₂、(26)は遺物番号398の所より出土した底部破片であり、全て平底を呈している。第9図(27~30)は本址より出土した全ての石器であり、数は4点と少ないが割合にバリエティーに富んでいる。(27)はP₂内より出土し、短冊形の打製石斧で、硬砂岩製である。上端部は大きく欠損している。(28)は(27)同様に短冊形の打製石斧で、粘板岩を用い、上端部は欠損している、(29)は綠泥岩を用いて工作した磨石で、周縁部に自然面を残し、他はよく研磨されている。(30)は花崗岩製の凹石で、凹みの中央部付近は三ヵ所のわずかな段を有し、上端周縁部は欠損している。



第8图 第4号住居址出土土器拓影 (1 : 3)



第9図 第4号住居址出土遺物 土器実測図(24~26)1:3 石器実測図(27~30)1:2

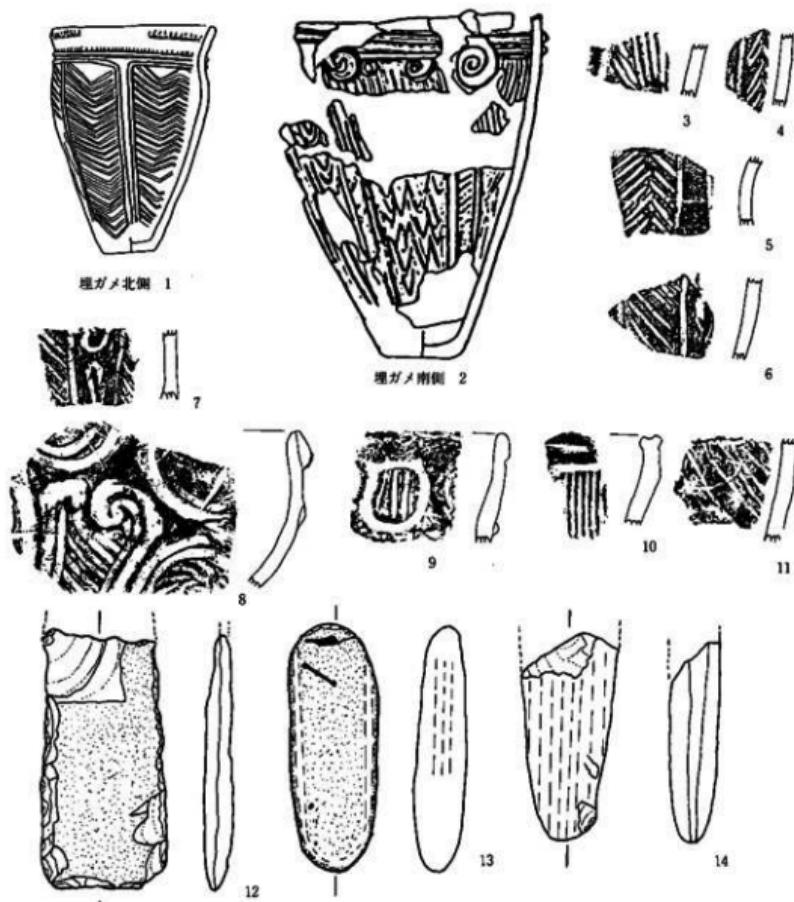
(d) 第5号住居址出土遺物 (第10図 図版5 7)

第10図の1は本址の東壁に正位の状態で検出された埋甕であり、口縁部に接して緑色岩の平板を蓋石にしてあった。本土器は復元してみると完型品となり、高さ23.4cm、口縁径16.9cm、底部径5.7cmをそれぞれ測定できる。口縁部文様帶は素文化している。口頭部にかかる部分に点列状に刺突文を押し、それに沿って隆線二本回わしてある。下の隆線から底部にかけ隆帶懸垂文を配する。これによって縦位の区画が構成され、その中に綾形文を施してある。

(2) は1の埋甕と近接して発見され、正位の状態で出土している。口縁の埋設レベルは(1)より5cm位下がっており、同一に埋めたかどうか不明であろう。口縁文様帶は太高い隆帶を二本横走させ、要所、要所に渦巻文を加えてある。この渦巻文から二本隆線を垂下させて縦位区画帯を構成し、この中を綾杉文にて装飾している。

(1～2) は赤茶褐色を呈し、焼成は良好であり、胎土中に少量の雲母、長石を含む。(3～11) の色調は全て黒褐色気味であり、焼成は良好。(3～7) は無文地に懸垂文と綾杉文がからみあって文様構成をしている。

(8) は大きく内反する壺型土器で、大きな渦巻文による文様が主となっている。外面に多量の炭化物付着が見られた。(9) は破片中央部に円形区画文を施す。(1～11) は縄文中期後葉に位置づけられると思われる。(12) は短冊形の打製石斧で、粘板岩製、上部欠損。(13) は硬砂岩を用いた磨石、(14) は緑泥岩を利用した乳棒状磨製石斧で、上部は折れている。



第10図 第5号住居址出土遺物 土器実測図(1～2)1:6 土器拓影(3～11)1:3 石器実測図(12～14)1:2

(e) 第6号住居址出土遺物 (第11~12図)

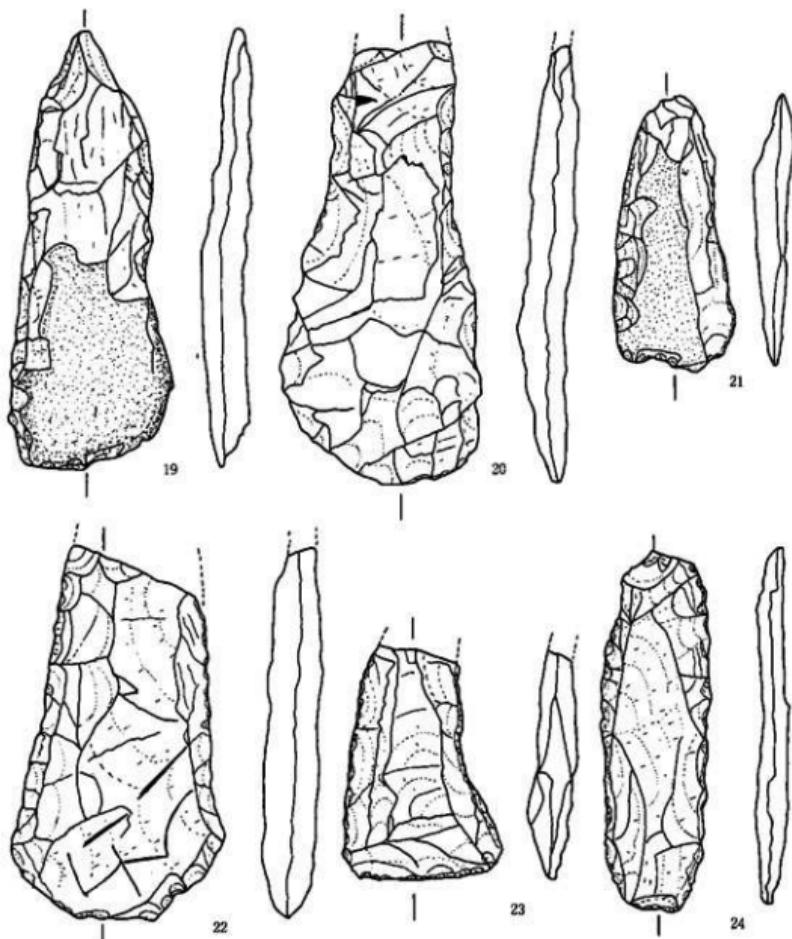
本址はほぼ全容の解明できた住居址であったが、割合に遺物出土量は少なかった。土器に関しては第11図(1~18)に集約できるであろう。これらは全て縄文中期後葉に位置づけが可能である。まず、最初にこれら破片の色調を概観してみる。赤褐色(1~6・18)、黒褐色(2・3・9・11・18)、茶褐色(4・5・9)、その他は黄茶褐色をそれぞれ呈し、焼成はほぼ良好、どの破片にも多少の含有量差はあったが長石粒を含み、器面にその痕跡を認める。

(1)は大きく内反する變形土器の口縁部破片であり、口縁上部は素文帯が発達し、その下に沈線を横走させ、変化を持たせるために刻目を施してある。中部から下部にかけて沈線ワラ



第11図 第6号住居址出土土器拓影(1:3)

ビ手文が顯著である。(2～3　5　14)は隆帶渦巻文の見事な発達が表現されている。(3)は隆帶による楕円形状区画文が構成されている(6)は横位の高い隆帶文、低い縦帶隆文を組み合わせ、二つの文様帶の接点に刻目を付けてある。隆帶懸垂文が主をなし、それらの間に連弧文(11)、綾杉文(12)、垂下沈線文(15)が組み合わさり、色どりを添えている。(7)は素文帯と縦横沈線文の組み合わせ、(8)は斜目沈線文と横帶隆線文のそれぞれ組み合わせが主体文様となっている。

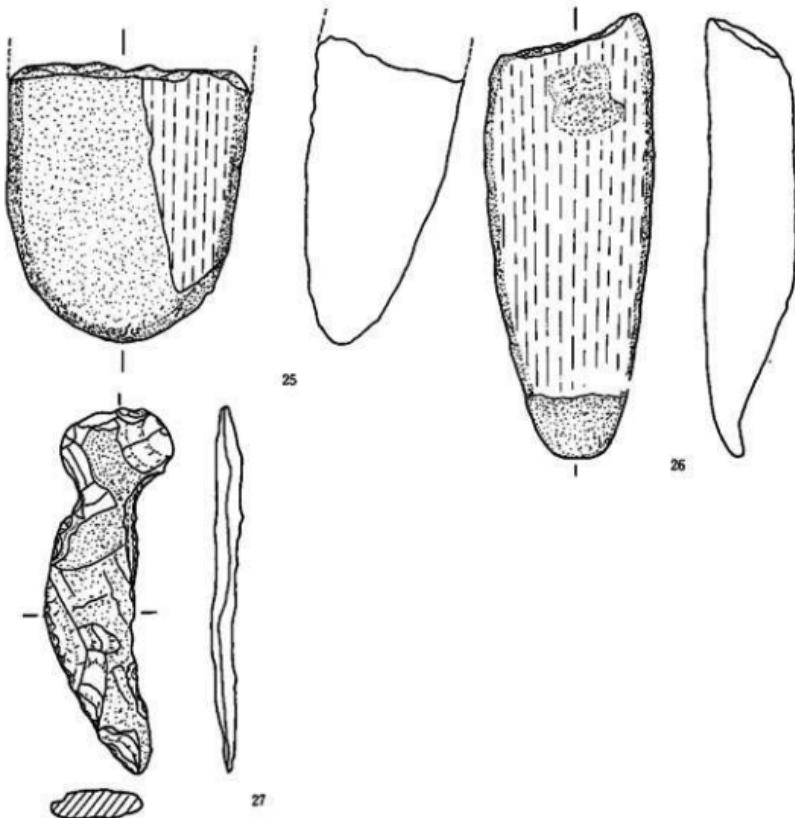


第12図 第6号住居址出土石器実測図(1:2)

(9) は極めて薄手の土器片で、口縁は内反を呈している。浅い沈線を横、斜目、曲線状にそれぞれ配し、それによって区画された中に連続刺突文を施してある。全般的な諸要素からみて本片は東海系のものであろう。その他は単純な文様構成である。杉綾文(13)、縦走細沈線文(15)、幅広ろで浅目の沈線文(16)、幅広ろで浅目の斜走沈線(18)

(第12図 第13図)には石器実測図を掲載してある。今回検出された住居址の内では本址は多くの石器類を出土している。(19)は撥形の打製石斧で、緑色岩を利用。(20~22)は硬砂岩を用いた撥形の打製石斧で、上部は欠損している。(21)は緑泥岩製で撥形を呈する打製石斧

(23)は硬砂岩材の打製石斧で、撥形を呈し、上端部は欠損している。(24)は短冊形の打製石斧で、緑泥岩を利用している。(26)は緑色岩を用いた乳棒状磨製石斧で、上端部は欠損、先端



第13図 第6号住居址出土石器実測図(1:2)

部分に自然面を残すが、よく研磨されている。(25)は緑色岩製の磨石で、上端部は欠損し、研磨部分が片寄っている。(27)は粘板岩の縦形石匙で、出来ばえは優秀である。

(f) 第7号住居址出土遺物 (第14~15図 図版5 7)

本址は第6号住居址、第8号住居址との重複関係で、その検出状態は決して良好とは考えられなかった。今回ここに説明を加える土器と石器類は全て縄文中期中葉の前半に位置づけられる。

(第14図1~3)は遺物出土番号No.401と名付けてある。全般的にみて色調は赤褐色系統が9割を占め、わずかに1片だけ黒褐色(12)が含まれている。(1)は刺突文が連続的に施されている。細片であるがため、この刺突文がどこ位置に該当するか把握できないのが残念である。縄文が地文を成しているもの(2 3 13)、(13)は大きくくの字状に屈折する口縁部破片であり、粗い縄文を磨消かの手法にて沈線による円形文を浮き立たせている。

無文地にキタビラ状文様を導入した土器片(4 7 9 10 14)がある。これらはさらに他の文様をも取り込み、(4)はキタビラ状文の一端を集合するよう弧状沈線文を、(10)は隆帯を横走、縦位させ、さらに横位波状沈線文を、(14)はキタビラ状文を沈線にて矩形に区画をそれぞれ工夫してつけてある。(5)は器厚1cmに達しようとする厚手の土器片で、突起状を呈する口縁部である。二条の沈線によって三角形状区画文が骨格を成し、この中央に月か太陽を象徴するであろう円形文が強調的に意匠され、周辺はキタビラ状文の組み合わせによって具象化を帶びている。下部は斜走沈線文を付加し、全体的な文様バランスを保持している。多量の雲母を含み、チカチカと黄金色を放っている。

(6)は縁取りが顯著であり、無文地に高く、太い隆帯文を縱走させ、その結末は渦巻文にて留めている。内面に多量の長石粒が露出し、白さが目立っている。(12)は横位の隆帯を三本並走させ、その上に等間隔に連続刻目文を印刻してある。(8)は破片中央部に隆起帯文を突起状にクローズアップして付け、その周辺に沈線や刻目文を補助的に加飾してあり、一見するには文様は極めて豪華である。

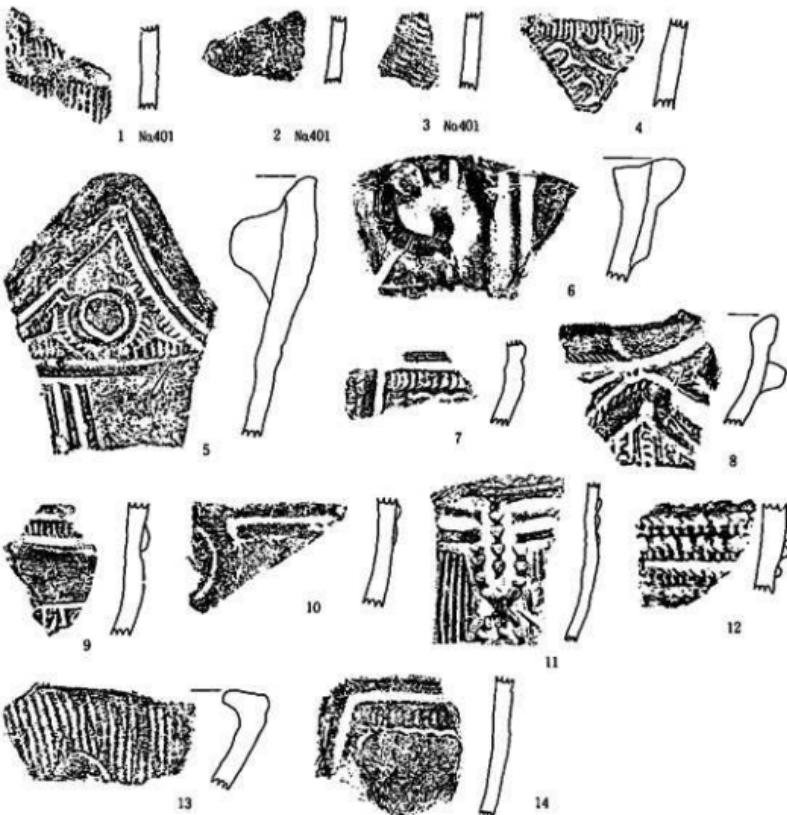
(10)は低い隆帯を弧状や横位に貼り付け、その上に連続爪形文や、刻目を付け、文様装飾を増している。(11)は深く、鋭い沈線を縱走させ、その中央部付近に三本歯状隆帯を貼り付け、その上に斜目状刺突文をつけてある(拓影では鮮明に出ていない)。

(第15図の15)は埋甕炉に使用されており、上・下部ともに欠損していた。以上の状態からみて第二次的廃品利用ではないだろうか。破片上部の文様帶は隆帯により三角形状区画文を整然と配し、その直下にさらに沈線を施し、区画文帶をより一層前面に打ち出している。区画文中の主流文様はキタビラ状文や刻目文である。中部文様帶は隆帯を横位に半月状に貼り付け、上部は三角形状区画文と接している。下部文様帶はキタビラ状文がいかにも動いているように表現している。本土器はこれらの文様体がうまく合致しており、極めて美的感覚に優れてい る一品であろう。

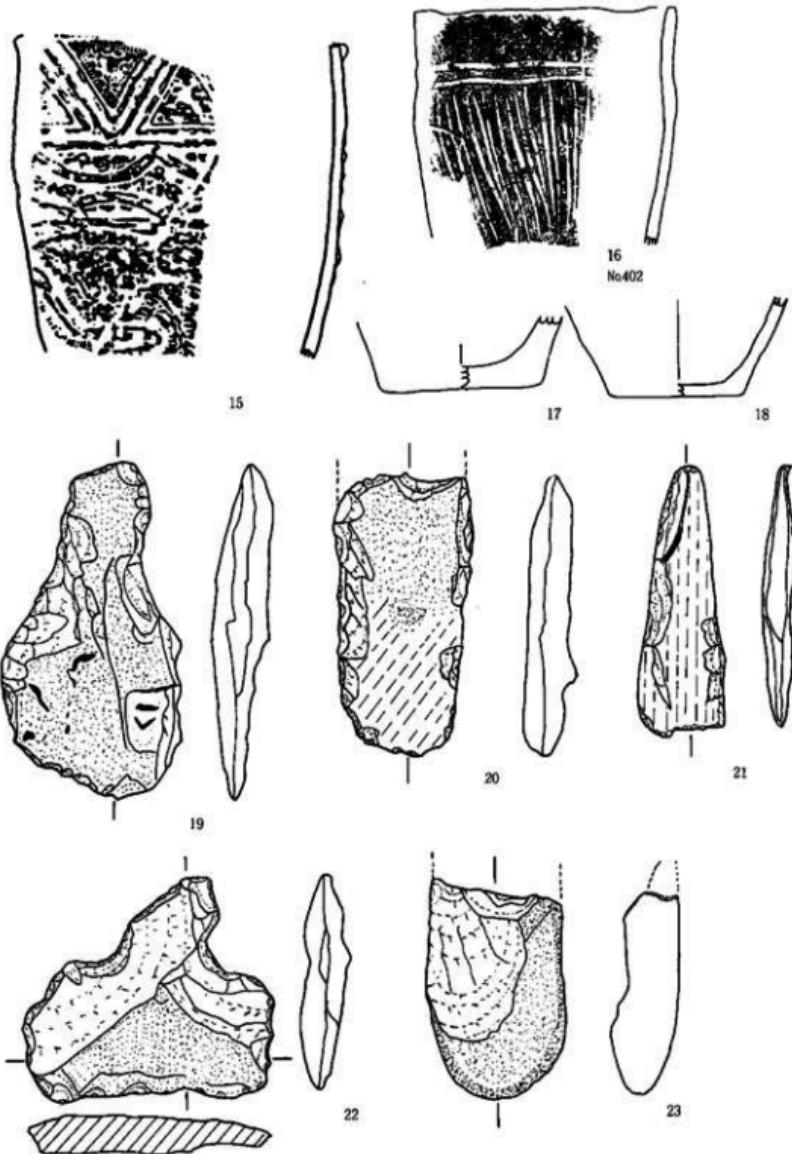
(15図の16)は薄手の土器で、波状口縁を呈する。口縁直下は無文帶が主流で、ややくびれる口頭部に沈線が横に並走し、これに接して無雜作に沈線が垂れ下がっている。文様形態からみて平出田A式の一派かと思われる。(17~18)は平底を呈している。

(19)は一見して三昧線に使用する複型を里し、硬砂岩製打製石斧である。(20~21)は緑泥岩を加工した定角式磨製石斧である。先端の刃部は(20)はやや甘く、(21)は鋭くなってしまっており、同じ石斧の部類であるが、その用途は違いがあると思われる。

(22)は硬砂岩製の横型石匙で、やや大型化している。縄文中期の住居址からしばしば出土しており、その用途について諸説が論じられている現状である。(23)は硬砂岩製の敲石であり、上端部は節理面より欠損している。



第14図 第7号住居址出土土器拓影(1:3)



第15図 第7号住居址出土遺物 土器実測図(15)1:6 土器実測図(16~18)1:3 石器実測図(19~23)1:2

(g) 第8号住居址出土遺物 (第16図 図版5~7)

本址はその全体を発掘調査できず、また、南側は第7号住居址との関係で、出土した遺物は割合に少なく、第16図に掲載した全ての土器は縄文中期後葉に属すると思われる。まず(1~7)を見てみよう。色調は黒褐色(3~4)、赤褐色(1~5~7)、赤黄褐色(2)をそれぞ



第16図 第8号住居址出土遺物 土器拓影(1~7)1:3 土器実測図(8)1:3 土器実測図(9~10)1:6

れ呈し、焼成は全般的に良好である。(1)～(7)は文様形態より同一個体と考えられ、主流文様は渦巻文と斜走沈線文の組み合わせである。(3)は横位の文様が主であり、幅広ろの斜繩文地へ陸帯とヘラ状沈線を配してあり、文様的には極めて簡素である。(4)は無文帶と綾杉文帶が縦位の沈線によって明らかに区画され、従って文様配列が歴然としている。

(5)は縦状の粘土紐と大きな綾杉文が(2)は粘土紐と連続刺突文が大端に表現され、簡素のなかにも美感を漂わしている。

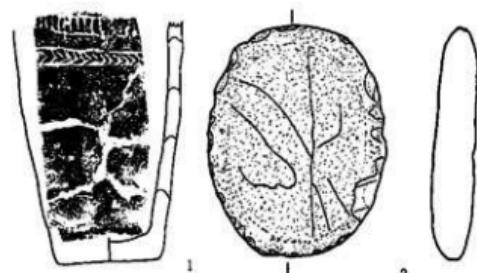
(8)は平底を呈する土器片で、外面は綾杉文、底部は網代底となっている。(9)は第7号住居址と接する本址の南側で正位の状態で検出された埋甕である。口縁が内反する壺型土器で、口唇直下は無文帶を成し、その下は沈線が楕円形状に配され、一種の区画文帯を形成し、その中に小さな波状貼り付けが横に見られる。胴部から底部にかけて、粘土紐の貼り付けによる渦巻文から隆起懸垂文が四本くっきりと配されており、本土器の主要な文様の一つとなっている。その他、胴部から底部にかけて沈線による綾杉文や渦巻文が深々と刻み込まれ、明確に時代決定ができる。茶褐色を呈し、焼成は良好である、縄文中期後葉と思われる。

(10)は炉内及び炉壁より出土した土器で、口唇はやや丸味を呈し、段を成す。口縁上部文様は沈線が斜走し、中央部付近に渦巻を貼り付けてある。口頸部付近は二本の隆線が横に施され、その縁に刻目を明瞭に刻してある。渦巻文から垂れ下がった隆線は大きな曲線を描きながら胴下部に至る。さらに再び上昇し、胴上部で渦巻文を表現するスタイルとなる。胴部の地文は深く、鋭い角度で刻み込まれた綾杉文である。色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。縄文中期後葉に位置づけ可能であろう。

(h) 第9号住居址出土遺物 (第17図)

本址はほんの一部分の発掘調査に限定されたため、遺物の出土はほんの少量であったため、第17図に掲載しただけである。

(1)は現存14.5cm、底径5.4cm程をそれぞれ測定でき、小型の円筒形深鉢形土器である。破片上部に横位沈線にて二つの横帯区画文を編成し、上部には縦位の刻目、下部には連続



第17図 第9号住居址出土遺物 土器実測図(1)1:3
石器実測図(2)1:2

爪形文を押捺し、時代的特徴をかもし出している。輪積痕が明瞭に見られ、土器製作工程が理解できる。縄文中期中葉頃に位置づけられると思われる。

(2)は硬砂岩製の敲石で、周縁部は剝離痕が丁寧に調整され、その出来ばえは見事であり縄文中期人達は大事に使ったのであろう。

(1) 造構外出土遺物 (第18図)

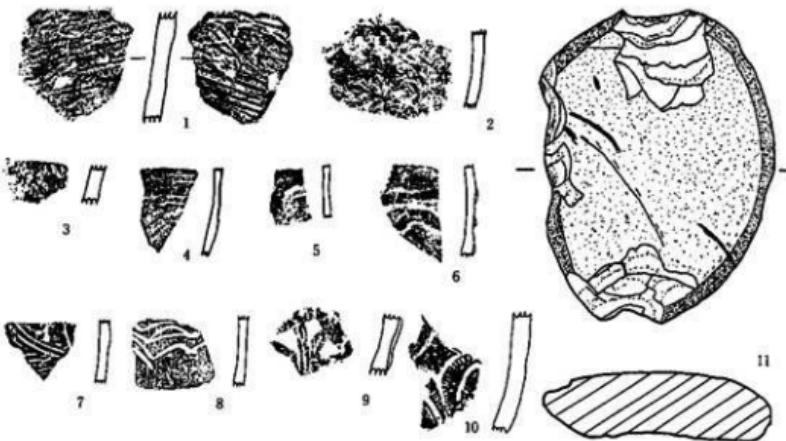
本図に掲載した10片の土器片と石器1点は造構とは何んら関連なく出土したものであるが、出土した事実は確かであるので報告しておく。(1)はアナダラ属科のハイガイ背面による貝殻条痕文を内・外面に斜走や横走させてある。赤茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土中に多量の雲母、長石、纖維を含んでいる。文様、胎土の状態からみて、本片は縄文早期末葉茅山上層式に属すると思われる。(2)は外面が剥落しており、文様傾向は全く判別できない。黒褐色を呈し、焼成は中位、ただ、多量の雲母、纖維を含んでいる特徴から見て縄文早期末葉に位置づけが可能となろう。

(3～9)は所謂、薄手細線指痕文土器群の一派に含まれている。器厚は名の示す如く、極めて薄く3mmから5mm程度を示す。(3～5)は外面剥落のため、文様の細分是不可能であり、茶褐色を呈し、焼成は良好。無文地に沈線を横位(4)や弧状(7)に走らせ、極めて簡素な文様構成となっている。色調は茶褐色(4)、赤褐色(7)を呈し、焼成は良好。無文地に隆帯を押しつぶしたような状態で貼り付け、その上に(6)では刻目、(9)では細かな縄文をそれぞれ施してある。色調は黒褐色(6)、赤黄褐色(9)を呈し、焼成は良好である。

(8)は無文地に破片上部では沈線を蛇行状に横走させ、それを磨消かのように細沈線を無数に縱走させてある。茶褐色を呈し、多量の長石を含み、焼成は良好である。以上、(3～9)は縄文早期末葉に東海地方で隆盛を極めた天神山式の一派であろう。現在、天神山式はI式・II式と細分化がこころみられている。(10)は無文地に低く幅広の隆帯、沈線、刻目を一セットとして文様を組み合わせてあり、縄文中期中葉頃に位置づけられよう。

(11)は硬砂岩製の石錐で、やや大型化している。

(飯塚政美)

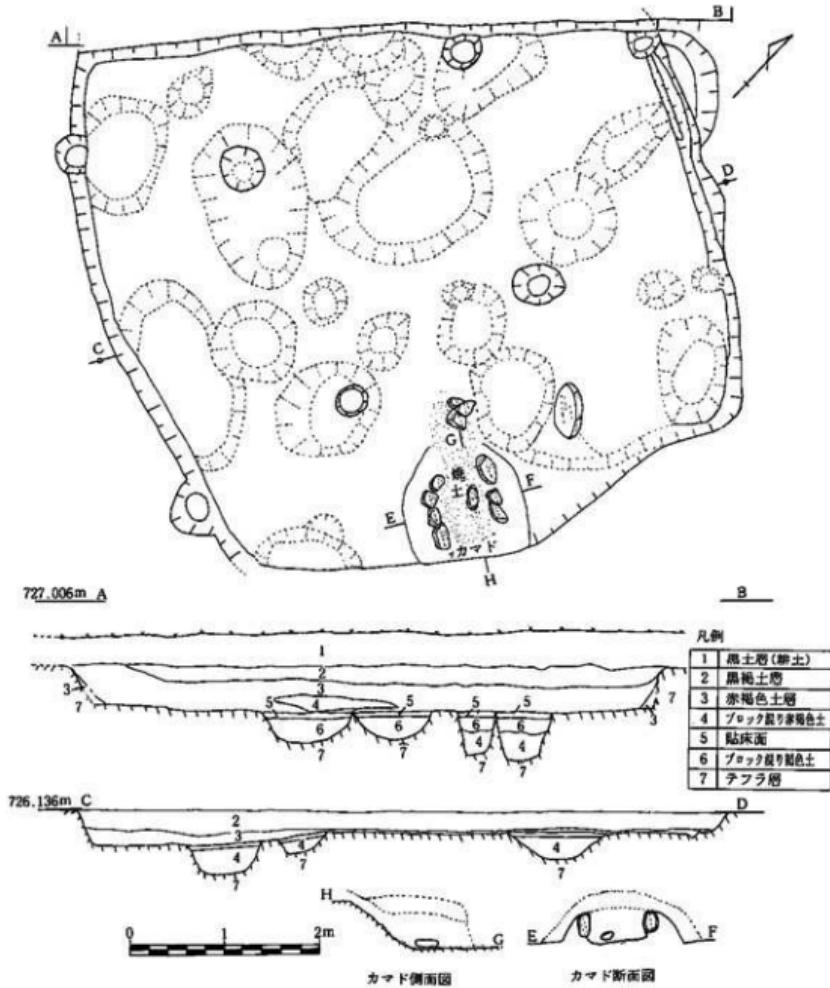


第18図 造構外出土遺物 土器拓影(1～10)1：3 石器実測図(11)1：2

(3) 平安時代の造構と遺物

第2号住居址 (第19~20図 図版3 5)

本址は単独な姿で検出され、すこし離れた南側に第3号住居址、第4号住居址、北側に第6号住居址がある。耕土は約30cmあり、その下層のテフラ層を掘り込んで構築した隅丸方形状の竪穴住居址である。東西両側は用地外のため発掘調査は不可能であった。従って、東西の規模



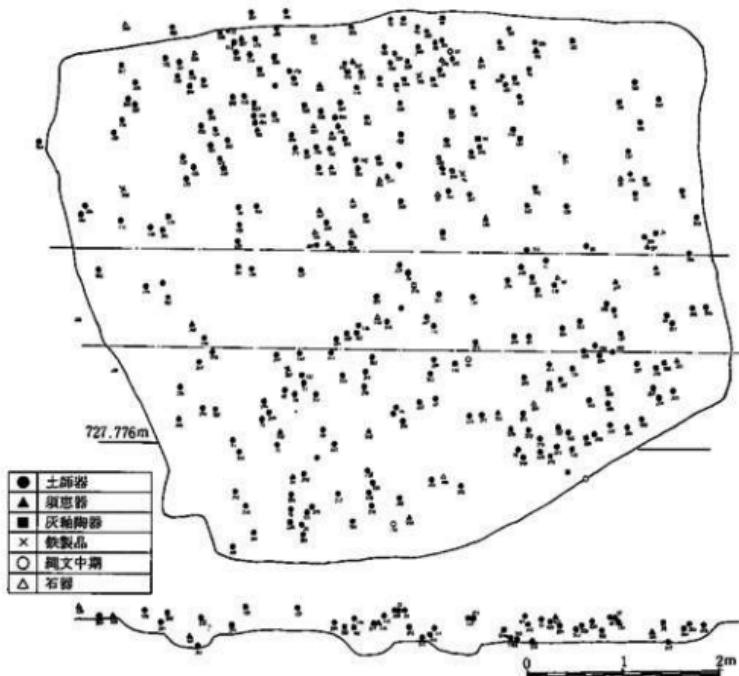
第19図 第2号住居址実測図

は不明であるのに対し、南北の規模は6m×50cm位を測り、大型の住居址に含まれる。

壁高は25cm～40cm位を測り、やや外傾気味で、若干凹凸を認め、堅くなっていた。床面は堅いテフラ層の叩きであり、凹凸がわずかに存在し、カマド周辺はその叩きが極めて良好であった。これは構築時の叩きと、その後、人の動きの激しいカマド周辺は人為的に踏み固められた現象であろう。

床面上に各所にわたってピットが多数発見されたが、第19図に表示してある破線部分のピットは全て貼り床状を成しており、従って本址のピットとは何も関係ないかと思われる。よって本址に關係するピットは同図に実線で表示したもののみであろう。カマドは東壁中央部付近にあり、石組粘土カマドであって、その残存状態は良好であった。カマド構築に使用された石は花崗岩や粘板岩が多く、赤々と焼けて変色したり、亀裂が数条にわたって走っていた。カマドの焚口付近から床面にかけて焼石や焼土が存在していた。

遺物はカマド周辺に相当量出土、土師器、須恵器、灰釉陶器が主流であり、よって本址は平安時代中期頃と思われる。



第20図 第2号住居址出土物分布図

遺物（第21図～24図 図版6 8）

本住居址から出土した主な遺物の種類は土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品の四種に分類可能である。これらの概要を順々に述べていく。

(第21図の1)は土師器内黒深堀である。外面は調整のロクロ目が見受けられる。口径16.9cm位を測る。2は土師器内黒で、器形は深堀である。外側に形成時のロクロ痕が認められる。口径は16.5cm位である。3は土師器内黒堀で、底部に糸切り痕が残っている。口径13.2cm、高さ3.8cmを測る。4は土師器内黒堀で、底部には糸切り痕が見られる。外面にもロクロ痕が認められる。口径11.7cm、高さ4cmを測る。

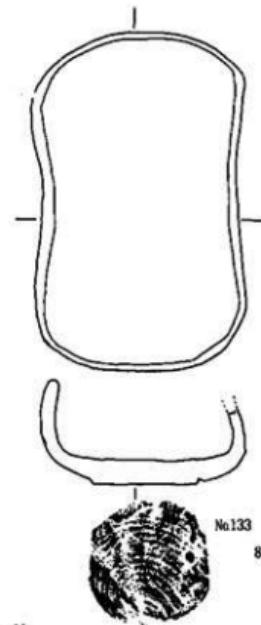
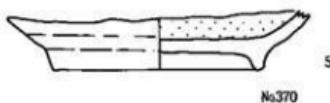
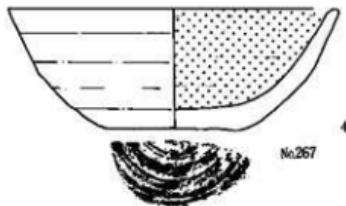
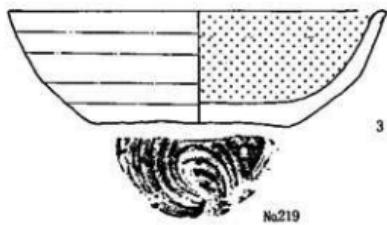
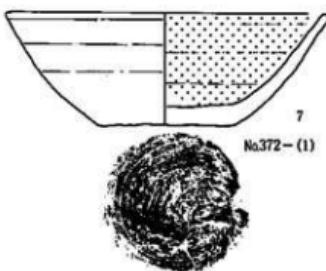
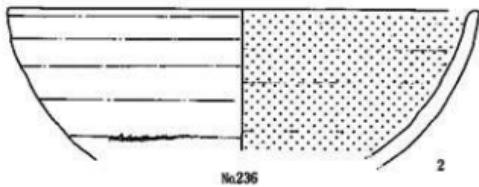
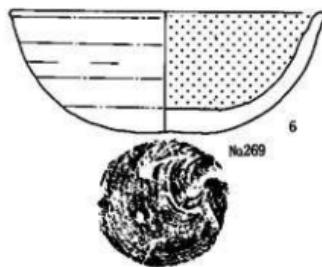
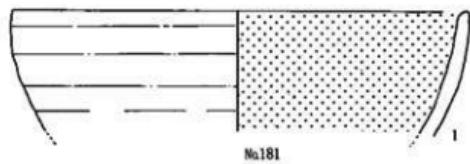
5は土師器内黒付高台堀の底部、底部の糸切り痕を箇削りしている。6は土師器内黒平堀、内・外面にロクロの調整痕が残り、底部に糸切り痕が見られる。7は土師器の内黒平堀、外面に調整のロクロ痕が残り、底部には糸切り痕が見られる。口径は11.3cm、高さ3.9cmを測る。8は土師器耳皿である。長口径11.6cm、短口径6.8cm、高さ3.6cmを測る。色調は赤褐色を呈し、底部に糸切り痕が認められる。

(第22図の9)は土師器内黒堀の破片であり、外側面に調整時のロクロ痕が見受けられる。10は土師器腰の底部破片であり、胎土に長石粒が多く含まれている粗製土器である。11は土師器腰の底部破片であり、外面はナゼの長石粒の移動痕が認められ、底部内側には荒目の調整痕が残る粗製土器である。12は須恵器突帯文四耳壺の破片で、大きな不明である。器厚は6mmを測る。13は須恵器腰の胴部である。外面には平行叩き目文、内側はわずかに半円形叩き目が残る。厚さは4～5mmを測る。焼成は良好で、灰白色を呈する。

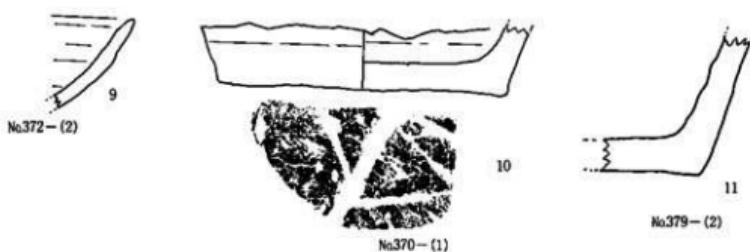
14は壺形の須恵器胴部破片であり、外面は平行の叩き目、内面は円形の叩き目が残る。厚さ7～8mm、焼成は良好で、灰黒色を呈する。15は須恵器腰の胴部破片であり、外面は平行叩き文が施されて、内面は叩き目が明らかでない。厚さ6mmを測り、色調は灰黒色である。16は須恵器腰の口縁部破片であり、外面は平行叩き目痕が認められる。内面にはわずかながら円形の叩き目痕が残っており、口縁部は横ナデで調整されている。厚さ9mmと厚く、灰黒色を呈し、焼成は良好である。

17は須恵器腰の胴部破片であり、外面は平行叩き目文、内面は叩き目文が認められず、横ナデ痕が見られる。灰黒色を呈し、焼成は良好で、器厚は9mmと厚い方に属する。18は須恵器腰の胴部破片であり、外側面に平行叩き目文、内面には半円形の叩き目痕が認められる。灰黒色を呈し、焼成は良好で、器厚は7mmを測る。

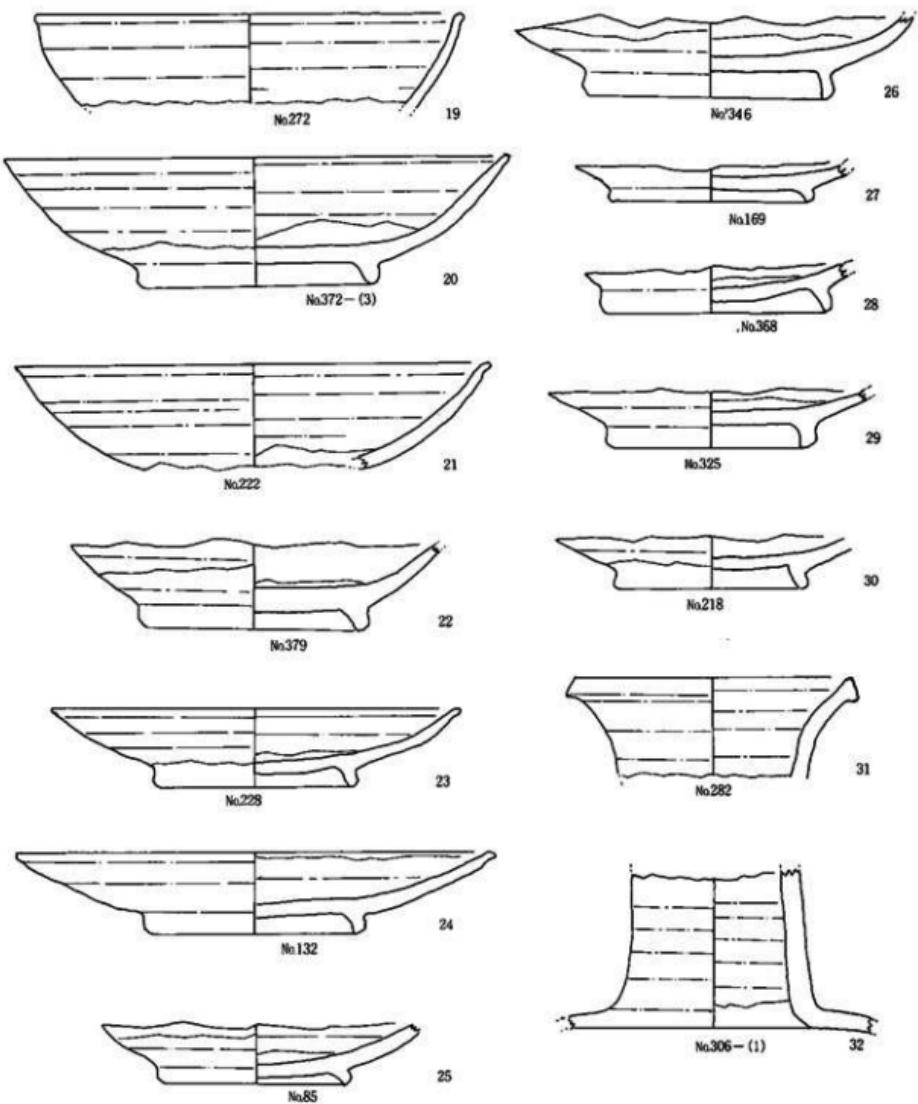
(第23図の19)は灰釉陶器碗の口縁部破片であり、内・外面ともに灰釉が施されている。器形は胴部から口縁にゆるく立ち上がり、口唇は外反している。白青色の釉が覆っている。20は灰釉陶器付高台碗であり、施釉は内・外部を除いて全面に刷毛塗されている。产地は美濃・多治見、光ヶ丘と考えられる。21は灰釉陶器碗の破片であり、施釉は薄目の灰釉が内面では底部を除き施され、外面は胴部の下まで施されている。产地は美濃、光ヶ丘か。



第21圖 第2号住居址出土遺物実測図(1:2)



第22図 第2号住居址出土遺物実測図及び拓影(1:2)



第23図 第2号住居址出土遺物実測図(1:2)

22は灰釉陶器付高台碗と考えられる。釉は内・外面の底部を除いて全面に施されている時期は10世紀頃と思われる。23は灰釉陶器付高台皿であり、内・外面の底部を除いて施釉されている。底部に糸切り痕が見受けられる。24は付高台の灰釉陶器皿であり、内・外の底部を除いて施釉されている。立ち上りは口縁部に向って直線的に広がり、口縁部は外反している。黒笠90期頃と考えられる。

25は付高台の灰釉碗であり、施釉は内外の底部を除いて内外面に施されている。時期は高台形態から見て黒笠90期と考えられる。26は付高台の灰釉陶器碗である。施釉は内外面の底部を除いて全面に施されている。高台の形態から黒笠90～折戸53期頃ではと考えられる。27は付高台灰釉陶器皿である。釉は内外面の底部を除いて施されている。また、底部には糸切り痕が残っているのが見える。高台の形態から黒笠90～折戸53期頃の作と考えられる。28は付高台灰釉陶器皿であり、施釉は内外の底部を除いて施されている。29は付高台灰釉陶器皿である。施釉は内外面の底部を除いて施されており、高台の形態から、黒笠90期頃と考えられる。

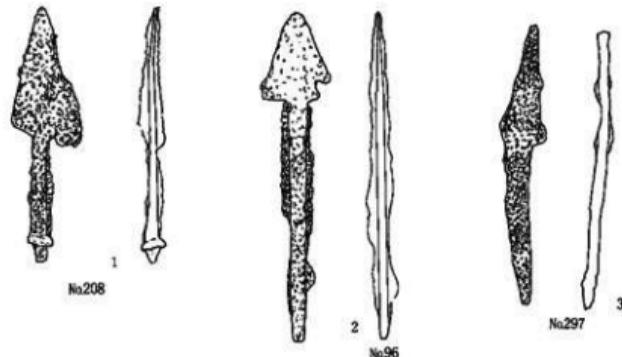
30は付高台灰釉陶器皿であり、底部には糸切り痕が残り、内外の底部を除いて全面に施釉されている。31は灰釉陶器短頸壺の口縁部破片であり、全面にわたって釉が施されている。32は灰釉陶器長頸壺の破片であり、灰釉が全面に施されている。今回調査された第2号住居址は、総じて黒笠90期から10世紀前半頃と考えられる。

(第24図の1～2)は鉄鎌である。(1)は鎌身では長さ4.5cm、下幅2.5cm、中央部では2cmを、中茎の長さは4.5cmをそれぞれ測り、その残存状況は良好であった。

(2)は鎌身では長さ8.5cm、下幅2.4cm、中央部では2.7cm、中茎の長さは8.5cmをそれぞれ測り、その残存状況は良好であった。

(1～2)は平根鎌に含まれ、10世紀前半頃の作であろう。

(3)は刀子であり、長さ9.7cm、最大幅1.6cmをそれぞれ測り、材質が良



第24図 第2号住居址出土遺物実測図(1:2)

質な鉄であったため、その残存状況は良好であった。(1～2)と同様、10世紀前半頃の作であると思われる。

(友野良一)

第III章 所 見

畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区が実施されるに及び伊勢並遺跡で緊急発掘調査が実施されることになった。今回で3回目の緊急発掘調査となったわけである。過去2回については、それぞれ報告書が刊行されているので、そちらを参照して下さい。

今回の調査は、土地改良事業にかかる道路拡幅部分について実施した。幅2mのトレンチを南北に長く入れ、この時点で遺構の確認ができれば拡張していく調査方法を導入していく。

次に、発掘調査によって知り得た成果を項目別に記して所見とする。

1. 検出された遺構—縄文中期初頭竪穴住居址1軒、縄文中期中葉竪穴住居址2軒、縄文中期後葉竪穴住居址5軒、平安時代中期竪穴住居址1軒、合計9軒であった。これらを細分してみてみよう。まず円形状、橢円形状プランを呈するもの7軒、隅丸方形状のもの1軒、隅丸長方形状のもの1軒であった。次に住居址の切り合い関係について触れてみると、これに関係するのは第3号住居址を第4号住居址が切っている。第6号住居址の北東一角は第7号住居址に貼り床をして床面のレベルを一定化している。第7号住居址は北側で第8号住居址に切られている。住居址の中心的役割を果たした炉やカマドについて考えてみよう。第1号住居址は床面上に赤々と焼土が検出され、地床炉形態を有していた。本址から縄文中期初頭五領ヶ台I式土器片が出土している。この時期には埋甕炉形態も見受けられるが、これらの差異は地域的な問題が密接に関係しているのではないか。今後、参考資料の増加を期待するものである。地域的差異とは五領ヶ台I式では関東系、梨久保式では中央高地系のことである。第3、4、5、8号住居址の炉はそれぞれ、タライ状を呈するように中央をやや深く掘り凹めてあり、炉壁面及び周辺に炉石に使用したと想定される花崗岩や変成岩が散乱していた。このような形態は縄文中期後葉に隆盛する大型炉の流行かと思われる。第6号住居址の炉は典型的な大型石圓炉があり、前者との相違点が認められた。従って、縄文中期後葉の内でも若干の時間差があるのではないか。第7号住居址は埋甕炉の形態を成していた。この炉に使用した土器より縄文中期中葉の前半で埋甕炉が波及していた好資料となり、これが衰退して大型の石圓炉へと変遷していく。

第2号住居址のカマドは平安時代中期に隆盛している石組粘土カマドであり、カマドの位置からして西風に対する家の建て方を考えている。

2. 伊勢並遺跡からは、上伊那郡誌に掲載されている背色珪岩製の搔器と、頁岩製の葉状尖頭器が表面採集ではあるが発見されているところから、伊勢並遺跡は伊那市における旧石器時代の遺跡としても注目しなければならない重要な遺跡である。また、昭和38年の伊勢並遺跡調査では伊那考古クラブが林茂樹氏の指導により調査を行った。その結果地表下1.0mに達するまでに、古墳時代・弥生・縄文中期・縄文早期の遺物が層位的に包含されていることが判明した。出土した遺物は柵ノ湖II式土器・格子目文の押型文・天神山式・木島式などの土

器と、石器では小形片刃・磨製石斧・石鎌・骨石製有孔の玉類などが検出されたと報告されている。これら発掘の成果から伊勢並遺跡は縄文早期から古墳時代にいたる複合遺跡であることを位置付けられた。

3. 今回の発掘調査では造構外からアナグラ属科ハイガイの背面による貝殻条痕文を施した茅山上層式、薄手細線指痕文土器群の一派に含まれる東海系の天神山式土器片が少量出土している。造構内（今回は全て住居址）から五領ヶ台I式、梨久保式、平出III A式、藤内式、井戸尻式、曾利式の縄文中期土器片が相当量出土した。これらの土器片に混じって打製石斧、磨製石斧、磨石、石匙、凹石、敲石、石錐等々の石器類が比較的少量出土した。平安時代中期の土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄鎌、刀子の検出が見られた。

本遺跡地周辺は平安時代令制東山道ルートの一候補地として注目されており、同時代の造構検出はこれを裏付けさせてくれるのではないか。灰釉陶器は全て東山道を通ってこの地に移入されたのである。

最後に、発掘調査及び本報告書の編集にあたって上伊那地方事務所土地改良課職員一同、関係諸機関の諸氏に対し、心より感謝致します。
(友野良一 飯塙政美)

図 版



遺跡地を東側より眺む（上）

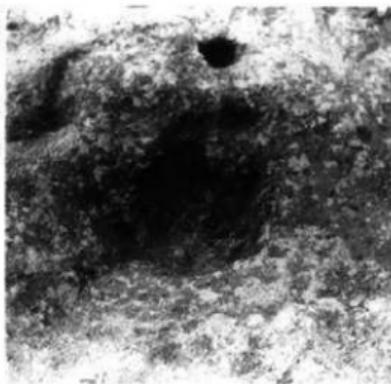
遺跡地を西側より眺む（下）



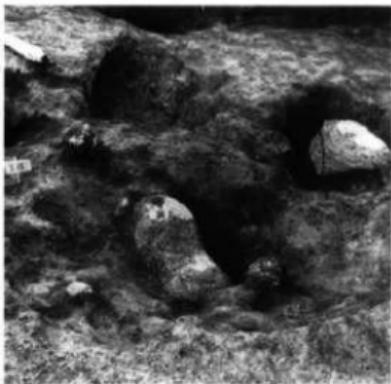
第 1 号住居址（上） 第 3・4・5 号住居址（下）



第6・7・8・9号住居址（上） 第2号住居址（下）



1



2



3



4



5



6

1 第1号住居址炉址

2 第3号住居址炉址

3 第4号住居址炉址

4 第7号住居址埋甕炉

5 第6号住居址炉址

6 第7号住居址埋甕炉断面

図版5 遺構及び遺物出土状況



1



2



3



4



5



6

1 第2号住居址カマド正面

3 土器（第1号住居址出土）

5 土器（第7号住居址出土）

2 第2号住居址カマド側面

4 埋壺（第5号住居址出土）

6 埋壺（第8号住居址出土）



1



2



3



4



記念撮影

- 1 鉄器（第2号住居址出土）
4 土師器（第2号住居址出土）

- 2~3 灰釉陶器（第2号住居址出土）



第5号住居址出土埋甕（南側）



第5号住居址出土埋甕（北側）



第7号住居址埋甕炉の使用した土器



第8号住居址出土埋甕



第8号住居址炉内出土土器



土師器（第2号住居址出土）



土師器（第2号住居址出土）



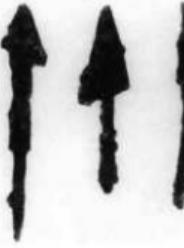
土師器耳皿（第2号住居址出土）



灰釉陶器（第2号住居址出土）



灰釉陶器（第2号住居址出土）



鐵器類（第2号住居址出土）

赤坂遺跡

目 次

目 次	3
挿図目次	3
図版目次	3
第Ⅰ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査の経緯	4
第2節 調査の組織	4
第3節 発掘調査日誌	5
第Ⅱ章 調 査	6
第1節 調査の概要	9
第2節 造構と遺物	9
第Ⅲ章 所 見	9

挿図目次

第1図 地形及びトレンチ図	6
第2図 トレンチ内地層図	7

図版目次

図版1 造路遺景及び発掘状況	
----------------	--

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

今回発掘調査の対象となった赤坂遺跡は畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区に伴なう緊急発掘調査であった。調査実施に至るまでは各種の保護協議、事務手続が行なわれた。これらについては前に触れた伊勢並遺跡の所を参照して下さい。

平成6年10月24日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長 小田切 仁

委員長代理 小坂 榮一

委 員 岸 敏子

" 小松 光男

教 育 長 宮下 安人

教育次長 有賀 博行

事 務 局 新井 良二 (社会教育課長)

" 林 俊宏 (社会教育係長)

" 大久保 律子 (青少年教育係長)

" 上田 達明 (青少年教育主査)

" 飯塚 政美 (社会教育課主査)

" 有賀 恵 (社会教育課主事)

発掘調査団（赤坂遺跡）

團長 友野 良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚 政美 (" ")

" 本田 秀明 (長野県考古学会会員)

" 松島 信幸 (第四紀学会会員)

調査員 寺平宏 (第四紀学会会員)

作業員 柴佐一郎 小松孝臣 小田切守正 有賀秀子

大久保富美子 酒井とし子 溝上美弥子 (敬称略順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成6年12月6日 赤坂遺跡の範囲で、中央自動車道に西側で接し、南側は小黒川に近い幹線農道（支道8-39号線）を掘り下げていくが、遺物・遺構の検出は無かった。

平成6年12月7日 前日と同様な作業を重機を借りて進めていくが、遺構・遺物の出土は無かった。早く遺物の顔を見たく胸が高なった。

平成6年12月8日 重機にてト

レンチ掘りを実施して本日で3日

目を経る。そのトレンチの延長は
90mを超したが、遺構・遺物の検
出は全く無かった。

平成6年12月9日 本日をもつ

てトレンチ掘りを終了する。全測
図とセクション図を作製する。

平成6年12月10日 発掘器材の

あとかたづけ、整理、整頓、洗浄
を実施し、明日の運搬に備える。

平成6年12月11日 本日をもって全ての発掘を終了する。発掘器材、測量器材一切をトラッ
クにて伊那市考古資料館へ運搬する。

平成6年12月～平成7年3月 図版の作製、報告書の原稿執筆、編集、報告書を印刷所へ送
り、印刷にとりかかっていただく。

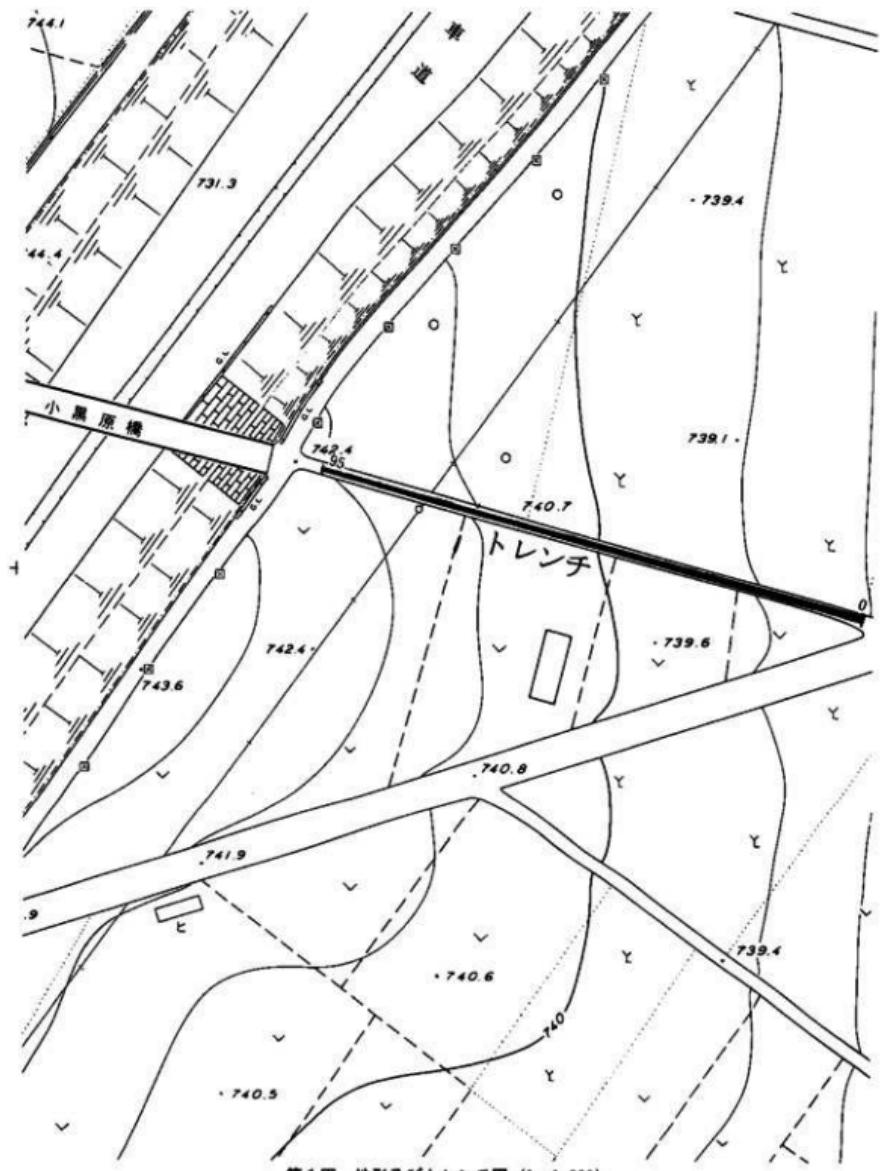
平成6年3月 報告書の刊行

(飯塚政美)

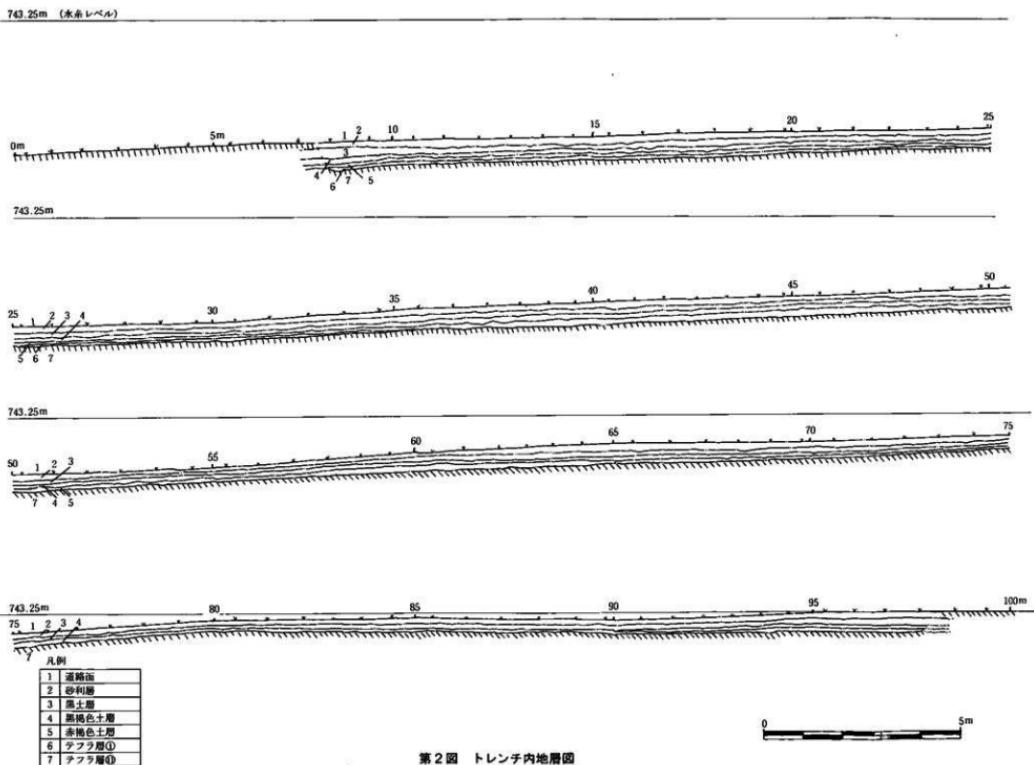


発掘風景 (重機にて掘り下げを進めていく)

第II章 調査



第1図 地形及びトレンチ図 (1:1,000)



第2図 トレンチ内地層図

第1節 調査の概要

今回、トレンチを入れた場所は赤坂遺跡の内でも南側に寄った地点であった。トレンチは幅1m、長さ98mの規模で設定した。現在は農道に利用されており、地層は極めて安定化を呈し、擾乱状態は全く認められなかった。

地層状態を上から記すと次のようになる。
①道路面 ②砂利層 ③黒土層 ④黒褐色土層
⑤赤褐色土層 ⑥テフラ層Ⅰ ⑦テフラ層Ⅱ

第2節 遺構と遺物

今回、発掘調査を実施したトレンチ内では遺構・遺物の検出は何もなかった。

第III章 所 見

畑地帯総合土地改良事業が伊那西部地区で実施されるとのことで赤坂遺跡を緊急発掘調査した。今回の調査は、伊勢並遺跡同様、土地改良事業にかかる道路及びその拡幅部分について実施した。幅1mのトレンチを東西に長く入れ、この時点で遺構の確認、遺物の出土状態を見て拡張していく調査方法を導入した。

過去、赤坂遺跡は昭和48年度、中央道開削時に長野県教育委員会が中心となって緊急発掘調査を実施した。その時の成果を列記しておく。縄文中期の土壙2基、時期不詳の土壙2基、縄文早期末葉木島式土器片、縄文中期初頭の土器片、縄文中期の打製石斧、縄文中期の大形石匙石鐵、削器等々であった。

今回の調査の結果、遺構・遺物の検出は全く無く、赤坂遺跡の範囲確認ができ得たと思われる。

(飯塚政美)

図 版



遺跡地を北東より眺む（上）

トレンチ掘り終了（下）

報告書抄録

ふりがな	いせならび あかさかいせき							
書名	伊勢並・赤坂遺跡							
副書名	畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区							
卷次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友野良一 飯塙政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396 長野県伊那市大字伊那部3050 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦1995年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 市町村	東経 遺跡番号	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いせならび 伊勢並	いなしにしまちく 伊那市西町区 おぐろはら 小黒原	69	2374	...	平成6年 11月8日～ 平成6年 12月5日	400	畠地帯総合土地改良事業 (伊那西部地区)	
あかさかい 赤坂	"	66	7665	...	平成6年 12月6日～ 平成6年 12月11日	100	"	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
伊勢並	集落址	绳文 平安	縄文中期竪穴住居址 8軒 平安時代竪穴住居址 1軒	<ul style="list-style-type: none"> ・茅山式土器 ・天神山式土器 ・五領ヶ台式土器 ・勝坂式土器 ・加曾利E式土器 ・土師器 ・須恵器 ・灰陶陶器 ・鉄器 ・刀子 	五領ヶ台I式の隅丸長方形状竪穴住居址 1軒が検出された			
赤坂					遺構・遺物の検出は全くなかった。			

伊勢並・赤坂遺跡

—— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

平成7年3月17日　印刷

平成7年3月20日　発行

発行所　上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

印 刷 所 小松総合印刷所

